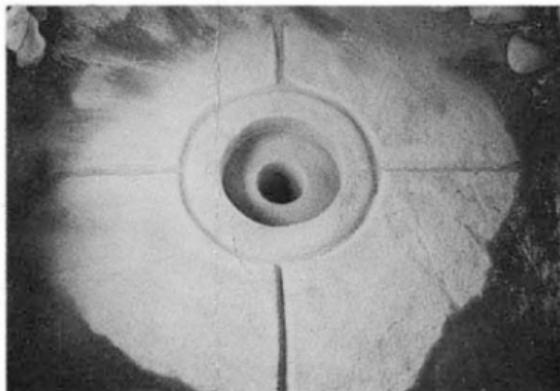


山王廃寺跡第2次発掘調査概報



前橋市教育委員会

1976.3

序

古墳文化の頃、東国社会の中心として、繁栄をきわめた前橋市域は、7世紀の後半以降、仏教文化が侵透し、8世紀に入ると絲社町山王の地には寺院が建立された。山王庵寺のことである。この存在を示す遺構や遺物には、塔心磚、石製鰐尾、桟巻石さらには綠釉陶器などがあり、これらにより山王庵寺は、帝にみる豪莊草庵な古代寺院と推定され、文化財として、あるいは古代史研究の資料として、極めて貴重なものとされている。

ところで、こうした山王庵寺跡に対する本格的な発掘調査は、最近まではほとんどなされておらず、伽藍配置は勿論のこと、その規模、形状等は全く不明であり、この解明は、研究者をはじめ多くの関係者から強く要望されていた。

こうした状況の中にあって、前橋市教育委員会では、昨年度は、該当地域の土地改良事業の実施に先がけて、寺城確認のための発掘調査を行ったが、本年度からは長期的な発掘調査を計画し、その第一年次の調査を、国庫および県費補助を得て、8月18日から31日までの間に実施した。

この度の発掘調査は、予想された建造物跡にはおよばず、その周辺部に終始した。よって、特に目立った成果はなかったと聞く。しかし、これが、今後の調査の大きな指針となることは勿論、山王庵寺解明の一契機となることは明らかであり、その意義することは大きいものと信じている。

ここに発掘調査の概報を刊行することに際し、これが実施にあたり、ご指導、ご協力いただいた関係各位に、改めて謝意を表します。

昭和51年3月12日

前橋市教育委員会

教育長 伊 藤 順

凡　　例

- 1 この概報は昭和50年度文化財保存事業費の国庫、県費補助金を得て、前橋市教育委員会が山王廃寺跡緊急調査事業として実施した概報である。
- 2 発掘地は前橋市総社町総社2404-1 および総社町昌楽寺通り村北1431の平石三夫・都丸氏司両氏の所有地であり、協力を得た。
- 3 発掘調査は前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係職員全員が発掘担当者となり、昭和50年8月18日～8月31日に実施した。
- 4 調査の実施にあたり、調査員を飯野邦彦（前橋工業高等学校教諭）・藤岡一雄（共愛学園教諭）・都丸肇（津久田小学校教諭）氏等に依頼し、また群馬大学歴史研究部学生・前橋工業高等学校歴史研究部生徒等の協力を得た。
- 5 専門分野の指導は群馬大学名誉教授尾崎喜左雄博士・群馬大学教授新井房夫博士の現地指導を受けた。
- 6 この報告書の執筆・編集については上記文化財保護係職員があたったが、執筆分担は次のとおりである。
I・II-1・IV 石川克博、II-2・III-1・2 相澤貞順、III-3・4・5 川合功、III-6 中村富夫
V 松島栄治

目 次

序

I 発掘調査にいたる経過	1
II 発掘調査	2
1 発掘調査の方法	2
2 地層	4
III 遺構	6
1 Aトレンチ	6
2 Bトレンチ	7
3 Cトレンチ	8
4 Dトレンチ	9
5 Eトレンチ	9
6 Fトレンチ	10
IV 遺物	12
1 瓦類	12
2 鉄製品	16
3 土器類	16
V 結語	19

図版目次

1. 発掘地点付近
2. A トレンチ内ピット一イ
3. B トレンチ内瓦の出土状態
4. B トレンチ内1・2号住居跡
5. E トレンチの状態
6. F トレンチの状態
7. 軒丸瓦
8. 軒平瓦
9. 軒平瓦・その他の瓦
10. 土器類
11. 土器・その他
12. 山王庵寺跡現況図
13. A トレンチ平面図および西側地層実測図
14. B トレンチ平面図および東側・南側地層実測図
15. C トレンチ平面図および南側地層実測図
16. D トレンチ平面図および北側地層実測図
17. E トレンチ平面図および北側地層実測図
18. F トレンチ平面図および地層実測図
19. トレンチ内遺構全体図
20. 軒丸瓦拓本
21. 軒平瓦拓本(1)
22. 軒平瓦拓本(2)
23. 文字瓦・その他の瓦拓本、および鉄釘実測図
24. 土器類その他実測図および拓本

挿図目次

1. 漢跡の位置図
2. トレンチの位置図
3. 発掘風景
4. 地層柱状図
5. C トレンチ内3号住居跡
6. F トレンチ東端付近の状態
7. 3号住居跡遺物出土状態

I 発掘調査にいたる経過

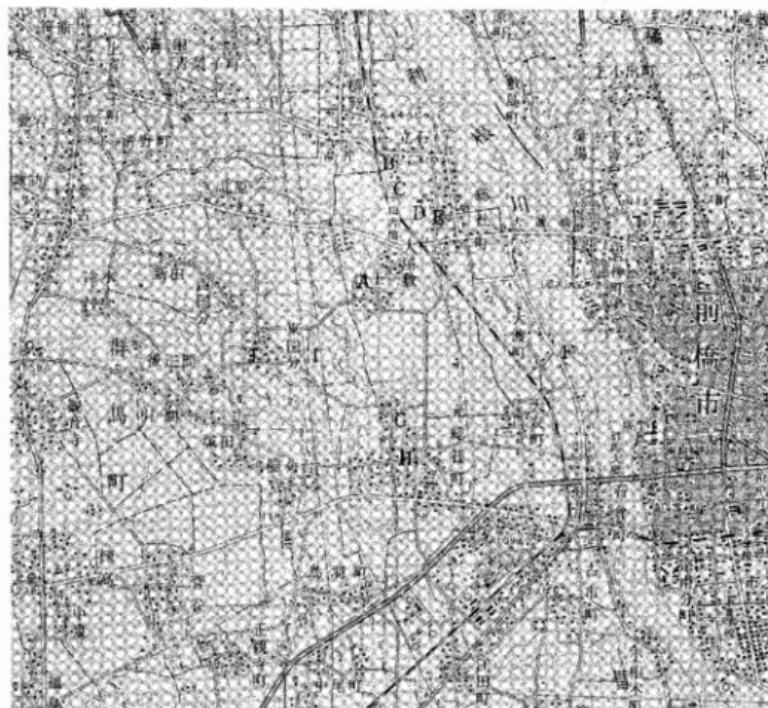


図1 遺跡の位置図（5万分の1）

A 山王庵寺 B 總社二子山古墳 C 愛宕山古墳 D 宝塔山古墳

E 鶴穴山古墳 F 王山古墳 G 總社神社山地 H 國府推定地

I 国分尼寺 J 正親町

山王庵寺跡は前橋市總社町總社字昌樂寺廻り地内に所在する。

本遺跡のある總社町山王地区は、前橋市街地から利根川を隔てた西郊の純農村地带で、古くから蚕桑業の生産で知られている。近年、前橋市街地の拡大は著しく、この地の周辺も、高崎バイパスの開通以来、産業道路ならびに国道道路の整備・閑闊地の造成・企業進出等により、急速な都市化が進んできている。こうした近年の産業構造の変化にともなって、産業道路に隣接する山王地区も農村から近代的都市近郊農村へと漸次変貌を遂げつつあり、畠地の宅地化も目立ちはじめている。このような社会状勢の変化の中にあって、耕地は旧態依然のままであるため、これが近代化へのひとつつの障害とされてきた。そこで、地権者は土地改良法に基く、『山王土地改良区設立準備会』を設立し、当該地区的土地改良事業を昭和49・50年度の2カ年にわたって実施することになった。

このような開発行為が、本遺跡地内外において進行し、とりわけ、土地改良事業実施を目前に控

えている一方では、遺跡の本格的な解明はなされないまま今日に至っていた。

しかしながら、大正年間に塔心礎が発見されて以来、耕作等の機会に数々の貴重な遺構・遺物が出土し、全国的にも注目を浴びるようになってきた。ちなみに、そのうちの主なものと次の一覧である。

①塔跡および中心礎石	昭和3年	国指定史跡
②石製鷲尾・石製鷲尾残片	昭和11年	国認定重要美術品
③根巻石	昭和28年	国指定重要文化財
④縁軸水注・塊・皿および銅塊	昭和29年	国指定重要文化財

このほかに、準像頭部・古瓦・および礎石群などがある。そして、これらの遺構・遺物から、白鳳期創建の壮大な寺院跡と考えられている。が、全貌を知るにはまだ、断片的な資料にすぎず、寺の規模・寺域・性格等は把握されていない。したがって、土地改良に対応した遺跡保存措置をとるために、資料が充分ではなく、昭和49年度、改良事業着手に先立って、「山王庵寺発掘調査団」を結成し、発掘調査を実施した。

調査の結果、塔心礎の北約120mの地に、獨立柱建築遺構の一部分を発見するとともに、心礎の北100m東100mの北東の地点で、金箔付灰化物（仏像の台座の一部と推定される）を発見し、少なくとも心礎の北は約120m、東は100mの線上までは寺域内であることが確認された。寺域の南限・西限について、寺院と直接接する遺構にはあたらなかったが、多数の住居跡が発見された。また、多量の瓦・土器・鉄製品等を出土し、遺跡解明の資料を充填した。

発掘調査終了後、一応、推定寺域内とみられるところは土地改良から除くことが申し合わされ、その後、昭和49年度土地改良事業は推定寺域南限近くまで実施された。

ところで、木造跡推定寺域内は、従来より、農家の密集地であって、約50%は宅地で埋まり、残りの50%が畠地などになっている。そして、宅地内にも相当遺構があるとみられてきた。今までに、遺跡の重要性が叫ばれつつも、調査されずにきたひとつの背景として、宅地の密集地であったこともあげられよう。昭和49年度には國らずも、土地改良事業を機に調査が実施されたが、遺跡の重要性は関係者の間でさらに強調されるところとなつた。土地改良事業および進行する宅地化などを迫った開発行為に対し、昭和49年の調査のみでは不充分であり、学術的にも緒についたばかりである。

もし、調査せずに放置するならば、残された畠地も、早晩、宅地と化し、本遺跡の規模・性格も不明のままとなり、保存・活用がますます困難となる恐れが生じてきた。かかる状況を憂慮した国・県も、緊急調査の必要性を認め補助金の交付を決定した。発掘調査費は、国庫・県費補助金および市負担を合わせた総計100万円で、前橋市教育委員会が主体となって発掘調査が実施された。

II 発掘調査

I. 発掘調査の方法

昭和50年度の調査においても、ひき続き寺域・寺の規模・性格の解明に主眼があつたが、予算等種々の制約の中で、ごく限られた一部の地域の調査にとどまらざるを得なかつた。しかし、有力な遺構を検出し、寺域など当初の目標達成の手がかりを得ると同時に遺跡保護の推進力にしうとうことが考えられた。かかる見地から、礎石群の存在がほほ明確で、しかも心礎の北40m東30m付近の伽藍配置中心部に近いことから有力な遺構があるとみられている地を選定した。

礎石群があるとみられている場所は、心礎の北40m東30mの阿久津社治氏宅地内である。ここは他よりも土地が一段高まっており、東隣、西隣の家にも高まりが神いでいる。これらを一度に調査



挿図2 トレンチの位置図

できない関係上、どこから先に手をつけるかが問題となつたが、地権者の事情を優先して考慮した結果、本年度は、東隣の平石氏宅地とその裏の都丸氏畠地を掘ることに決定した。

調査にあたっては、阿久津氏宅地以外にも礎石を有するような遺構があるか否かということがひとつの焦点となつた。したがつて、当然、トレンチの入れ方もそうした点を考慮し、阿久津氏宅地内の礎石であるといわれている石をボーリング棒で探し、それを東西及び南北線上に延長したところにトレンチがかかるようにした。

一方、寺の調査にあたっては、伽藍配置を平面でとらえることが必要であり、昨年度の調査結果も一貫して整理できるようグリッド設定を行なつた。

以下、その要点を記する。

(1)塔心礎利孔の中心を基準原点として南北(磁北)東西に軸線をひき、グリッド設定を行なう。なお、心



挿図3 発掘風景

表面をレベル原点とする。

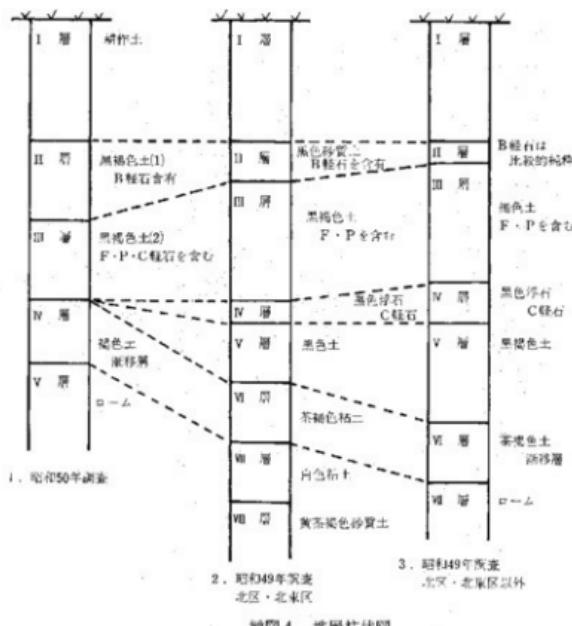
(2) 軸線は10mごとに区切って各軸線に囲まれた地域を基準の一区画とする。

(3) この10m平方のグリッドは各辺をさらに1辺2m×2mの小区画25個に細分して基本単位とする。

しかしながら、狭い宅地内において、グリッドの区画線にのっとったトレンチのみを設定することは不可能である。おむね、グリッドの区画にあわせても、土地の状態にあわせねばならなかつたことと発掘の進行状況に応じた拡張によって、多少変化したものとなった。しかし、基本区画に照らして位置を把握できるようにした(挿図2)。このようにして設けたトレンチを便宜上A~Fトレンチとした。

それぞれのトレンチのグリッド上の位置を示すと次のとおりである。

- Aトレンチ N34E50, N42E51, N42E48, N34E48 の4点に囲まれた範囲(多少拡張あり)
Bトレンチ N39E58, N42E58, N42E50, N39E50 の4点に囲まれた範囲()
Cトレンチ N58E57, N50E57, N50E50, N48E50 の4点に囲まれた範囲及び拡張区N46E54, N48E54, N48E50, N46E50(多少拡張、縮小あり)
Dトレンチ N46E50, N48E50, N48E46, N46E46 の4点に囲まれた範囲(多少縮小)
Eトレンチ N48E40, N50E40, N50E36, N48E36 の4点に囲まれた範囲
Fトレンチ N48E30, N52E30, N52E26, N48E26 の4点に囲まれた範囲(多少拡張)



挿図4 地層柱状図

2. 地層

山王庵寺周辺の地層をやや広範囲に見ると、總社町一帯は前橋台地面の北端付近に位置している。榛名山麓野の清里地域は榛名火山起源の火成岩類が前橋台地を覆い、一方前橋市街地大半の地域は旧利根川の広瀬川低地帯になっている。これらに狭まれた地域に總社町がある。山王庵寺の北東から東へは八幡川が流れている。この川は小さな河川であるが、清早から總社へ流れ込み、この周辺にあっては比較的明確な浸蝕谷を形成している川である。前橋台地は火山溶流堆積物(前橋泥流堆積物)とその上の火山灰質シルト粘土(水成上部

ローム層）とからなっており、山王廃寺周辺においてはこの水成土部ローム層が場所によりわずかながら様相を変えている。今回の調査は近接した地域の調査であり、ローム層にはほとんどおよんでない点もあり、発掘地点による地層の大きな相違は見られなかった。したがって全般的には柱状図1の様な順序が今回の発掘調査の結果ほぼ共通して見られた。柱状図1の各層は以下の様な状態である。

I層 耕作土 厚さ20~30cmが普通で、場所により40~50cmある。B軽石（浅間山軽石：1108年（天仁元年）²、または1281年（弘安4年）噴出と考えられている）以後の浮石を含み、粒子の荒い、ふかふかしている上。

II層 黒褐色土（1） 厚さは15~20cmある。B軽石を多量に含み、粒子は荒い。上端あるいは層中に瓦を含んでいる。

III層 黒褐色土（2） 厚さ25~30cmで、場所により10~20cmの地点もある。F・P（ニッ岳軽石：600年~610年頃の噴出と推定されている）とC軽石（浅間山軽石：4世紀頃の噴出と考えられている）を含み、粒子は粗く、しまっている。

IV層 褐色土、ロームへの漸移層である。

V層 ローム、部分的に砂質分が強くなるのは粘土化の進み方が突合っている。

概略以上の様な順序であるが、場所により、部分的にIII層とIV層との間の黒色土にC軽石を含む層がみられた。また、耕作等により、II層がなく、I層からIII層へ続く地点があった。III層はそれぞれの発掘場所により埋入物等に相違がみられ、細分される可能性がある。

これらの層のなかで遺構を佛壇している面は数層に分かれている。遺構の種類も柱穴状のピットが数種類あり、窓穴住居跡も発見されている。Bトレンチの瓦の敷かれたような状態はII層の上端でみられた。柱穴状ピットはIII層からとIV層から掘りこまれていることがわかった。BトレンチおよびCトレンチで発見された住居跡はII層下およびIV層から掘りこまれていた。

これら今回の調査の地層と前回の昭和49年調査の地層とを比較してみたい。

昭和49年の調査は寺域確認のための調査であり、塔心礎を中心に可能なかぎり方二町（一町はおよそ109m前後と推定されている）という推定寺域に近い点を選んで調査を実施した。その結果の地層の状態は柱状図の2と3である。2は寺域に隣接する遺構、遺物を確認した北区および北東区の柱状図であり、3は住居跡を発掘した北西区、南西区、南東区等の状態である。これら柱状図を見ると、2と3ではロームから漸移層にかけて顕著なように3の方が全般的に乾燥した状態を示しているのに対して、2の方は近くまで水の影響を受けていた様相を示している。今回の発掘地点1は沖積層を見ると、2・3に比してB軽石以前の堆積が浅く、F・PおよびC軽石の包含層が混合されている。沖積層のC軽石以降の堆積の状態は2と3が近似しているが、水の影響を近くまで受けているという点では1と2が位置的に近接しながら、地層の状態は1が3に近い様相を示していることが注目される。

今回の発掘地点は前述のように、昭和49年の調査の際に寺に隣接する遺構の発見された北区および北東区と塔心礎との中間にあたる地点の発掘であった。しかし、地層を見るとこれら北区および北東区に比して、

① 水の影響を近くまで受けている様相ではない。

② C軽石、F・Pの包含層がそれぞれ明確な一層をなしている状態ではない。

という相違がみられる。

III 遺構

今回は前述のようにA～Dの大小6つのトレンチを発掘し、古に關係あると考えられる建築遺構の柱穴状ピットをはじめ、堅穴住居跡も調査した。これらの遺構はⅢ層からとⅣ層からの掘りこみ面の異なるものがあり、また柱穴状ピットも形態の相違するものが発見された。建築遺構の柱穴は一つの面として調査された時、一つ一つの柱穴も柱穴としての性格を明らかにし、建築遺構も明確になるものと考えられる。今回の調査では面としての調査にいたらなかったので、ピットの性格を明らかにすることはできないが、発掘された各ピットの規模・形態等を中心として以下、各トレンチの状態を記述する。

1 Aトレンチ

このトレンチでは平面長方形の非常に掘面のしっかりしたピット1つと円形のピット2つと楕円形のややゆがんだピット1つを見出した。

ピット一イ：平面長方形で掘面のしっかりした深いピットである。この付近ではⅠ層下にⅢ層があり、このピットはⅢ層下から掘り込まれているが、Ⅲ層中からこのピットの上に粘土化したロームブロックが見られ、Ⅲ層とこのロームブロックの混土がこのピットを埋めていた。大きさは上巾111.5cm×86cm、下巾93cm×61cm、深さ61cmである。長方形の方位は南北中心軸が北20度西にふれている。ピットの壁面、底とも比較的凹凸はなくきれいに削られており、ピットの底中央には17cm×18cm、深さ5.5cmの柱受けとも見られるピットがある。

ピット一ロ：トレンチ西壁に一部かかっており、全面発掘できなかつたが、ほぼ円形のピットである。このピットはⅣ層の上巾から掘りこまれ、C輕石を含む黒色土がピットを埋めていた。大きさは上縁径約60cm、下縁径約50cm、深さ16.5cmである。

ピット一ハ：一部東壁にかかっており、完掘できなかつたが、ほぼ円形の掘面がしっかりしたピットであり、このピットの底からは土師器の高台付瓈形七器が出土した。この付近はⅠ層がピット直上までおよんでおり、Ⅲ層上面から掘りこまれ、Ⅲ層が埋めている。大きさは上縁径約70cm、下縁径約55cm、深さ44cmである。

ピット一ニ：Bトレンチとの境界にあり、一部はトレンチ北壁にかかっている。楕円形あるいはひょうたん形のピットで、その中にさらに不正楕円形のピットがある。この付近はⅡ層下にⅡ層とⅣ層との混土層があり、この面から掘りこまれて、Ⅱ層の上がピットを埋めている。大きさは上縁径約100cm×50cm、下縁約90cm×40cmでこの面までの深さは24.5cmである。中のピットは45cm×20cmの不正楕円形で、深さは8.5cmである。

各ピットの状態は以上のようなであるが、ピット一イは非常に掘面のしっかりした穴であり、明らかに建築遺構の柱穴と推定される。中央に柱受けとみられる穴のあることも注目される。また、しっかりした長方形であり、方位の誤差も比較的小ないと見られ、北20度西にふれている点は、今回のような調査方法の場合は、同時代的なあるいは共通な建物を見いだしていく上で注目してよいものと考えられる。

ピット一ニは形態からみて、柱穴かどうか大いに疑問であり、ピット一ロも比較的浅い点が疑問である。ピット一ハは円形の掘面のしっかりしたピットであり、この底から十器が出土しているが、現状ではこのピットに關係する堅穴住居はみられず、このピットも建築遺構の柱穴とがみられる。

このトレンチではピット一イのような長方形の柱穴とピット一ハのような円形の柱穴とがみられる。

2 Bトレント

このトレントでは、敷きつめられたような瓦の堆積・浅い溝・柱穴状ピットを含む各種のピットおよび竪穴住居跡等が発見された。

(1) 瓦の堆積

このトレントではⅠ層下に15~30cmという比較的厚いⅢ層の堆積がみられるが、Ⅰ層下のⅡ層上面に瓦の堆積がみられ、このⅡ層中には比較的多く瓦が含まれている。瓦の堆積している範囲はBトレントの南西隅であるN40°E50基点から北へ145cmの地点から南東隅であるN40°E58基点の南15cmにかけての線を南端として、北はトレント西寄りで最大巾約70cm、東寄りで170cmの範囲である。瓦分布範囲の両端の線は比較的明瞭な直線をなし、この線は東約12度南に向いている。西よりでは垣根の柵により、さらに広範囲にあったものが巾をせばめられたものとも見られる。中央付近には瓦のみられない部分もあるが、これは地層より耕作等最近の掘りかえにより見られなくなつたと考えられる。また、西寄りではこの堆積に接して北側に角閃石安山岩の削りかすの散布している個所があり、トレント東寄りでは白色の粘土化したロームが瓦の堆積にまざつてあった。また、比較的一直線をなしている両端の線の東半分では10cm×10cm程度の大きさの石が点在していた。瓦は密集して敷かれたようあり、瓦にまざつて土器の出土も見られた。

(2) 溝

Bトレントのはば中央に東西方向にはしる浅い溝がある。Ⅱ層は上面に瓦が密集し、層中にも瓦の包蔵がみられるが、溝はⅢ層が掘られ、Ⅱ層の下端が埋めている状態になつてある。溝の上端の最大巾は120cm、最小巾は72cm、下辺の巾は26~41cmで深さは約12~15cmである。Ⅲ層の上面がゆるい傾斜で溝をなしている状態であり、この溝がある企画を持って人為的に作られたような痕跡は溝の断面を見るかぎりでは認められなかつた。しかし、溝の両端の線の方向は東約10度南にふれており、前の瓦両端の線とほぼ同じ方向を示している点は注目される。

(3) ピット

ピットに大小合せて4つある。

ピット一 前述の溝の中にあり、溝と同じくⅢ層の上面から掘りこまれⅢ層が埋めている。大きさは25cm×20cmの楕円形で、深さ10cmの小さなピットである。

ピット二 溝の縁にあり、Ⅲ層の上面から掘りこまれ、Ⅱ層が埋めている。上辺60cm×78cm、下辺46cm×43cmのはば円形で、深さ20cmのピットである。

ピット三 大形のピットで、地層からみても明確にしにくい部分があるが、2つ以上のピットが重複しているとみられる。全体の形状は不正円形で、南端はトレントにかかっているが、現状で上端は3m×3.3mである。深さは74cmあるが階段状をなし、底はさわめてゆがんだ形をし、さらに深い2つのピットになつてある。この大きなピットはⅣ層の上面から掘られているが、この付近では、Ⅱ層下にⅡ層とⅢ層との混土層があり、さらに砂質をあび黄茶褐色の粘土化したロームがまざつて、このピットを埋めている。しかもピットの埋め方は横に漸次埋められてゆく形ではなく、黒色土、あるいはロームブロックの混土がそれぞれ様相をかえ、縱に5列になって埋まつてある。その下にはば一面に混土がある。このような状態であり、また、この付近では、Ⅳ層は比較的浅く、ローム層は水成のロームとみられ、砂質化、粘土化の状態は少しの距離で異なるので、埋上か自然堆積土か判断しかねる場合がある。しかし、このピットでは下部に黒色土の混土が一面にみられた。この面の下にあるピットは87cm×77cmと56cm×67cmの楕円形のピットで、深さは大きな穴の底から10cmと8cmである。

ピット四 1号住居跡のなかれあり、一部トレントの南壁にかかっている。住居跡床面から掘りこまれ、住居跡を埋めてるのと同じⅢ-2層が埋めている。大きさは56cm×49cmで、深さは床面から

42cmである。掘りこみ面および埋土からみて、1号住居跡の遺構の一部と見られる。

(4) 壓穴住居跡

1号住居跡 トレンチの南東隅に発見され、住居跡の北西部が発掘された。住居はIV層の上面から掘りこまれているが、この付近ではII層下に標識的なIII層とは異質なIII-1層がある。これはIII層に砂質の黄茶褐色ロームが混入したもので、この土が、住居の掘りこみの外から、住居内にいたり、住居の上半分を埋めている。埋め土の下半分はやや異質のロームの混ざったIII-2層である。発掘された範囲での住居の規模は北辺2.15m、西辺1.1mで、深さは47cmある。壁下には周溝があり、巾5cm～15cm、深さ6cm～16cmでめぐっている。西壁から1.2m、北壁から1.2mの地点に前述のピット4がある。

2号住居跡 トレンチの北東隅に1号住居跡と重複してその北にある。この住居跡も瓦の包蔵されているII層下にIII層があり、1号と同じIII-1層が住居跡を埋めている。住居跡の南西隅は1号住居跡と切り合っているため、確認できなかったが、現状での西壁は2.1mで深さは36cmある。壁下には周溝があり、この巾は5cm～20cm、深さは10cmである。1号と2号との前後関係は2号住居跡の方が約10cm高いが、1号住居跡に約10cmのはり床があり、2号住居跡の方があととも考えられる。これら1号、2号住居跡の出土遺物は現在整理中である。

Bトレンチの状態は以上のようにあるが、地層からみると瓦の堆積はII層のB軽石堆積以後である。このII層も比較的混入物は少ないが1次堆積とは見られない。また、2次堆積のII層が直接溝を埋めており、溝が埋められるのは少なくとも12～13世紀以後と見られる。ピット1、2もこれらと同じであり、ピット3および壓穴住居跡は地層的には3号住居跡と同じである。ピット3は形態的に不明な点があり、Aトレンチのピット一あるいはピット一ハ等の柱穴とは異質のものと考えられる。

3. Cトレンチ

耕作土が、約50cm堆積しており、II層を欠き以下順次にIII層約25cm、IV層10cmと堆積し、ローム面となる。III層が、遺物の中心包蔵層にあたり、埴輪片、瓦片、須恵器片、土師器片を出土する。

遺構は、トレンチ南西の隅に、土師器使用壓穴住居（3号住居）を確認している。その他は、全く遺構らしきものは認められない。



補図5 Cトレンチ内3号住居跡

3号住居跡 住居の北東隅が、トレンチにかかり、現状での計測値は、北壁2.20m、東壁2.40mである。非常に狭い範囲の確認となり、住居の大部分は、農道の下に埋まる。一部は、Dトレンチとの境界である地層断面作製のためのベルト下にかかる。Dトレンチには、住居がかかつておらず、地層断面ベルトは、巾1mであることから、北壁の長さは、3m前後であり、住居規模も小さなものであろう。

住居は、IV層を切り込んで構築されており、III層が埋土として落ち込んでいる。

積の立ち上りは、約30cmであり、壁内側に沿って、巾30～65cm、深さ8cmの側溝を巡らす。側溝中には、焼土穴と思われる小穴の痕跡は認められない。

住居内に柱穴は認められず、住居外にも、柱穴らしきものはない。住居を完掘したわけではないが、この時期の住居は、規模も小さく、柱穴がない例が多い（注1）ことから、柱穴を持たない住居と考えられる。

遺物の出土は、壇上であるⅢ層より、土師器片、須恵器片、瓦片が認められた。完形品ないし、完形品に近いものが、土師器片4個出土している。床面近くからは、丸片1個を認めた。

4. Dトレーンチ

Cトレーンチの西、地層断面ベルト巾1mを挟んでいる。地層の状況は、Cトレーンチ住居外と同じであり、遺物包含層、遺物の種類も同様である。

遺構は、ピット3個確認された。いずれもⅣ層より切り込み、埋土はⅢ層である。3ピットを、ピット-a・b・cと仮称すると、その計測値は次の様である。

名前	形	規模	深さ	備考
a	矩形	?	30cm	半掘
b	方形	32cm	35cm	
c	円形	42cm	24cm	一部木掘

ピット間の距離は、心間で

a～b 100cm + α

b～c 160cm

a～c 225cm + α

となり、形、規模が異なり、位置にも、規則性が見られない。

3ピットとも、何らかの建築遺構の柱穴と思えるが、その規模、形を推定するには、不充分である。また、同一建築遺構とは思えない。前後関係は不明であるが、埋土から見て、そう時代差を持つとは思えない。

なお、楕円形ピットが、中央より東にかけてあるが、耕作土に埋められた最近のピットである。

5. Eトレーンチ

Eトレーンチでは、耕作土が約40cmほど堆積しており、既にこの土中より遺物を出土する。耕作土を排除するとⅢ層となる。場所によって、多少色調が違い、褐色がかる所も認められる。遺物包蔵の中心は、この層となる。瓦片を中心として、土師器片、須恵器片、灰陶陶器片、綠釉陶器片を出土する。この層は約20cmの厚さである。次の層は約15cmでⅣ層と類似するが、後間B瓶石、C軽石、F Pの輕石を含む。このような層中にもわずかだが遺物が出土する。最下層がロームとなる。全体の層とも、南側に傾斜を示し、約10cm前後の比高差を示している。

北壁は中央部に、径1.9mで、両側に半円状に抜がる面が確認された。この面は、原点より-42cm～-52cmのレベルで、Ⅲ層とⅣ層の接合部分である。硬くしまり、良く剥げる。大変薄いため地層断面図にはあらわれない。遺物も少數であるが出土している。この面を南に迫ったが、攪乱のためつかめなかつた。

遺物出土状態は、原点より、-24cm～-32cmを示すレベル、即ち、地層から言えば、Ⅲ層中、上部にあたる部分に、より多くの出土が見られ一面をなすように思える。しかし、この面も、地層の傾斜と同様な傾向を示し、南にいくにしたがって深くなる。この面より下からも遺物の出土は認められるが、その数は少ない。面からの出土の如何に拘らず、完形品ではなく、全て破片であり、しかも小型である。

遺構は、ピット3個を検出し、それぞれ、ピット-a・b・cと仮称した。その計測値は次のようにになる。

名 称	形	規 模	深 さ	備 考
a	略 円 形	50 × 60 cm	40 cm	
b	矩 形 ?	50 × ? cm	68 cm	半 掘
c	矩 形 ?	50 × ? cm	20 cm	半 掘

ピット-a

切り込み面は、原点より-49cmのレベルからであり、IV層類似層から切り込み、ローム面を掘り進めてつくりあげている。ピットの堆土はIII層で、切り込み面はもう少し上になる可能性もある。

ピット-b

北半分は、区画外のため、未発掘である。硬く良く剥げる面上に位置するが、地層断面図を検討した結果、III層上面、原点より-28cmのレベルより切り込まれていた。埋土は、2層に分けられ、上層はII層である。下層は、上層と比較し、褐色が強く、軽石も少なくなる。しかし、全体としては、II層を中心とした層であり、埋土はII層としての範疇に入る。

ピット-c

南半分は、農道がはるため、未発掘である。切り込み面は原点より-67cmのレベルを示し、ローム面からである。

ピット-c付近は擾乱を受け、IV層の状態は地層との混土が目立ち、非常に不安定である。当然、切り込み面も上層に考えなければならない。

Eトレンチの状態は以上であるが、地層面、遺物出土状態、ピットの状態を組み合せ考えてみると、次のようになる。

(1) 遺物が面となり出土するレベルと、ピット-bの切り込み面レベルとが合致する。ここに--生活面が考えられる。

(2) 硬く良く剥げる面と、ピット-aの切り込み面のレベルが合致する。ピット-aでは良く剥げる面を確認できなかったが、間一生活面と思える。

(3) ピット-cは切り込み面が攪乱されており、どこにつくか不明である。ピット-bと同じ寸法らしい矩形の平面プランを有すると仮定した場合、ピット心々間2.45cmを計測でき、同時期、同一遺構とも思われる。しかし、ピット中心軸方向がやや異なり、弧を描いてしまう。ピット-aとの関係はあきらかでない。

ピット-a・b・c、それぞれ異なる時期と考えた方がよさそうである。

以上のようなことから、三時期にわたり、遺構面が確認され、(2)-(1)の順でつくられたと考えられる。(3)は不明と言えよう。ピットと仮称しているが、いずれも柱穴と思われ、建築遺構と推定される。しかし、狭い空間により確認したものであり、その規模や山王庵寺との関係は不明である。

注1. 前橋市の北端旧芳賀村に存する芳賀北部墳場跡の調査（昭和48年～50年）では、土師住居23戸が発掘された。奈良～平安時代のものであるが、そのほとんどは、柱穴を持たない、延3～4mの住居であった。

6 Fトレンチ

地層は、I層が北で28cm、南で約40cm堆積する。この耕作土を排除すると5～10cmの厚さにII層が堆積してIII層に続いている。III層は、標識的なIII層と小さい粒の砂質のローム・ブロックを含む層と、白色粘土のブロックを含む層との3層に分けられる。これが20～40cm堆積してIV層となる。IV層の上面はレベル原点より-20cm～-15cmを計る。地層の状態は、Eトレンチとはほぼ同じである。なお、IV層まで、木の根、耕作によるカマ掘り等が達していた。

造構はすべてピットであり、その状態は次のようである。

ピット-1

現状ではⅢ層から掘り込まれ、平面では隅丸長方形を示す。規模は上端で $100 \times 79\text{cm}$ 、下端で $91 \times 64\text{cm}$ 、深さ 48cm で底はレベル原点から -65cm を計る。ピットは直に掘られており、底は水平で、長軸を磁北に向いている。ピットの埋土は、底にⅢ層と砂質ローム・ブロックの混土層が約 20cm 堆積し、その上に瓦等の遺物を含むⅢ層が約 30cm の厚さ堆積している。底は非常に硬く、石などは認められない。このピットはピット-2を切って造られている。

ピット-2

現状では、IV層から掘られており、平面隅丸長方形を示す。北の一部をピット-1に切られており長径は不明である。その規模は上端で長辺 $(84 + \alpha)\text{cm}$ 、短辺 91cm 、深さ 25cm で底のレベルは最も深い所で -49cm を計る。ピットは直斜状に掘られ、底はほぼ水平であり、長軸は磁北に向いている。



写真-6 Fトレンチ東壁付近の状態

ピット内には、焼土と炭化物の小粒をより多く含むⅢ層がレンズ状に堆積し、その下にC種石を含む軟かい褐色土に砂質ローム・ブロックを含む層が埋まり、底となる。地層断面図には現われていないが、ピット上部にピットを埋めるように砂質ロームが堆積していた。ピット内には石は認められなかった。

ピット-4

Ⅲ層から掘り込まれ、平面形は隅丸長方形で北の部分が完全に掘り出されていない。規模は上端で長辺 $(41 + \alpha)\text{cm}$ 、短辺 65cm 、下端で長辺 $(33 + \alpha)\text{cm}$ 、短辺 45cm 、深さ 77cm を計る。底はレベル原点より -86cm である。ピットはほぼ垂直に掘り込まれており、底は水平である。長軸はN-28°Wにふれている。ピット内は砂質のローム・ブロックにⅢ層を含む層が $33 \sim 57\text{cm}$ 堆積し、C種石を含む褐色のやわらかい層があつて底になる。ピット内には石は認められなかった。

ピット-5

Ⅲ層から切り込まれた状態を示すが、Ⅱ層がピット内を埋めている。北半がトレンチ北壁にかかり、未発掘である。規模は現状で $43\text{cm} \times (34 + \alpha)\text{cm}$ 、深さ 35cm 、底は水平でレベル原点より -47cm を計る。ピット下半は径 38cm 、深さ 22cm で直に掘られているが、上半は、直斜状あるいは階段状になっている。ピット内には石は認められなかった。

ピット内は、白色粘土のブロックを含むⅢ層が埋めていた。底は硬いロームで、石は認められなかった。

ピット-3

Ⅲ層から掘り込まれ、平面形は隅丸長方形を示す。東の一部は未掘であるが底の状態からするとあとわずかである。規模は上端で $(60 + \alpha)\text{cm} \times 78\text{cm}$ 、下端で $70 \times 60\text{cm}$ 、深さ 77cm で底はレベル原点より -95cm を計る。ピットは直に掘り込まれ底は水平で、長軸はN-20°-Wにふれている。ビ

ピット-6

深い耕作により現状ではⅣ層から掘り込まれていたが、ピット内はⅡ層が埋まっていた。平面形は矩形で、その規模は、上端で長辺43cm×短辺36cm、下端では30×20cm、深さ45cmを計る。ピットは直に掘られ、底は水平で、長軸をW-23-Sに向いている。底はレベル原点より-75cmで、ピット内に石は認められなかった。

以上のようなあるが、ピット-2は深さ27cmと浅く、掘り込み方も斜めであるが、建築遺構に伴う柱穴跡と考えられる。他のピットも、その形状等からして柱穴と考えられる。従ってピット-1～6は、何らかの建築遺構の存在を示す柱穴と考えられる。

柱穴は、ピット-2を除き全て垂直に掘られ、底は全てが水平につくられている。ピット-1とピット-4の間に長径20～30cmの河原石が3個あったが、ピット中にはいずれも認められなかった。埋め土から見ると柱穴はⅡ層を中心とするものと、Ⅲ層を中心とするものとに分けることができる。Ⅱ層が埋める柱穴はピット-5・6の2個である。ピット-6は角柱が建てられていたと思われる事や、底も28cm低く、ピット-5と異なるようである。心心27.0cmを計る。Ⅲ層が埋める柱穴は、長軸の走向と規模から2つに分けられる。磁北に平行し規模の小さいピット-3・4となる。ピット-1とピット-2は平面形は同じであるが、底のレベルは異なり、ピット-2を切ってピット-1が掘られている。その距離は心心85cmを計る。ピット-3・4を比較するとピット-4は規模がやや小さく、底のレベルもやや高い。心心距離は217cmを計る。

地層からして、ピット-5・6はⅡ層が埋まっている事から他に比して新しいものと思われる。他のピット-1・2・3・4はⅢ層が埋まっている点においては共通するが、ピット間の切り合いからすると、ピット-2よりピット-1・3がより新しくなる。特により新しいピット-3はその規模・長軸の方向・心心距離からしてピット-4と何らかの関係があると思われる。非常に狭い範囲で確認された事であり推定の域を出ないが、同一建築遺構を示す柱穴列の一部と思われる。

IV. 遺 物

本年度の調査によって発見された出土遺物を大別すると瓦類、鉄製品、土器類であり、これらはダンボールみかん箱に約40箱分あった。以下、そのうちの主な物について記述する。

1. 瓦類

多量の遺物の大半は瓦であった。ほとんどが細かくくだかれた小破片であったが、軒丸瓦片11個体分、軒平瓦片15個体分、文字瓦4個体分等、特徴のあるものも発見された。丸瓦・平瓦について、も注目すべきものがあるが、整理が完了していない段階であるので、軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦等を中心に述べる。

(1) 軒丸瓦

④ 素面草文瓦 (図7-1, 図20-1)

素文様の周縁と内区に棒状の隆起線が1本みられるのみで、瓦当面全体の構成は不明である。周縁は直立線で縁高12cm、縁幅1.3cmである。胎土良好、焼成堅牢、灰白色を呈している。Aトレンチ表土層出土。なお、この瓦に類似したものが、すでに本遺跡において発見されていることが、紹介されている。
(注L)

② 複弁蓮華文瓦

複弁蓮華文と判断されるものが7点あった。完全なものは1点もなく、いずれも小破片であって、部分的なことしか判明しないが、以下、表によって表わす。

図番号	図番号 (写真)(拓本)	出土地	概要 および 測定値	胎土	焼成	色調
7-2	20-2	Cトレ (Ⅲ層中)	花弁端円形反転形式。 素文様。縁高1cm、縁幅1cm。背面はヘラ削り、接合部剥離痕あり。	細	堅	灰青
7-3	20-3	Bトレ (Ⅲ層中)	花弁端円形反転形式。 素文様、縁高1.2cm、背面に接合部剥離痕。	多 少 夾雜物あり	堅	灰白
7-4	20-4	Bトレ (Ⅲ層中)	花弁端円形反転形式。蓮子がみられるが、磨耗著しく構成不詳。背面はヘラ(もしくは刷毛)整形。厚さは薄い。	普通	堅	赤褐
7-5	20-5	Cトレ (Ⅲ層中)	花弁端円形反転形式。背面に接合部剥離痕。 厚さ約1.6cmの粘土板を芯にして、数mmの厚さの粘土を瓦当面と背面に上塗りしている。蓮華文は上塗りの面に施されている。	内 一 粗 (雜物多) 外 一 細	堅	内 一 灰白 外 一 赤褐
7-6	20-6	Bトレ (Ⅲ層中)	複弁であるが小片のため、その他不詳。	普通	堅	灰白
7-7	20-7	Aトレ (Ⅲ層中)	文様面に、布目の痕跡が認められる。 芯から粘土の分離をよくするために布を使用したのであろう。	細	堅	灰青
7-8		Bトレ (Ⅲ層中)	花弁端円形反転形式。素文様、縁高1cm、縁幅1.6cm。背面に指圧痕がみられる。	細	堅	灰青
7-9		Cトレ (Ⅲ層中)	素文様、縁高1cm、縁幅1.8cm。背面に接合部剥離痕。接合をよくするための刻み目がある。	細	堅	灰褐

表-1 複弁蓮華文瓦一覧

このほか、複弁蓮華文瓦の一端とみられるものが2点あったが詳しいことはつかめない小破片である。

以上の10点の複弁蓮華文瓦は、それぞれ形状、色調が少しずつ異なる別個体の部分であるが、いくつかの共通点を指摘し得る。周縁の残存していた4点はいずれも直立した素文様であること、花弁端の残存する5点はいずれも円形反転であること等である。一方、図20-5の良質粘土による上塗りの認められるものや、図20-7の文様面に布目の認めるものなど、製作技法上注目すべき

個別の特色をもつものも指摘される。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は重弧文瓦のみであった。これもすべて小破片となっている。以下、表によって示す。

図番号 (方貢)(拓本)	出土地	概要および測定値	胎土	焼成	色調
8-1 21-1 (Ⅲ層中)	Cトレ	三重弧文。厚さ3.7cm。凹凸面とともに、横なで整形のあとがみられる。	多少の雜物	堅	灰白
8-2 21-2 (Ⅱ層中)	Bトレ	三重弧文。厚さ3.8cm。凹凸面とともに、横なで整形のあとがみられる。	細	堅	灰青
		凹面寄りが剥落している。剥落部は一面を成している。			
8-3 21-3 (Ⅱ層中)	Bトレ	現存では弧が2本であるが、施文方法は前述の図21-1、図21-2と類似しており、同様な三重弧文と推定される。	細	堅	灰青
8-4 21-4 (Ⅱ層中)	Bトレ	三重弧文。凸面寄りの弧1本が欠落し、それは凸面にも及んでいる。凸面の割れた下には、明瞭に一面が認められる。これは、芯となった平瓦の凸面とみられる。	雜物多少あり、焼成で小石が突出している。	堅	灰青
8-5 21-5 (Ⅲ層中)	Fトレ	凹面寄りの2本の弧がみられる。三重弧文のうちの1本が欠落したものであろう。凹面に布目がみえる。	普通	表面 灰白 内部 黄褐色	
8-6 21-6 (Ⅱ層中)	Bトレ	凹面寄りが欠落しているが三重弧文とみられる。厚さ約0.7cm。凹・凸面ともに横なでの整形がされている。右側面に幅1mm、深さ0.5mmほどの沈線が1本ある。また、割れた断面中央部に0.6mm幅にヘルを横に強く押しつけてできたような線が1本みられる。	細	堅	灰白
8-7 21-7 (Ⅱ層中)	Bトレ	三重弧文。厚さ3.4cm。割れ口を観察すると、胎土は均質になっており、平瓦と瓦当部を接合させた痕跡はない。凹面・凸面とともに、横なで整形のあとがみられる。	細	堅	表面 灰青 内部 茶褐色

8-8	21-8	B トレ (II 層中)	二重弧文。厚さ3.2cm。かなり高温で焼かれたらしく表面は溶けてガラス質に変化しはじめている。凹面の割れた下からは、布目のついた面がみえる。これは、平瓦を作製してから瓦当を接合させたことを示すものである。平瓦の端面の厚さ1.6cm。なお、平瓦には、横骨痕の凹凸も認められる。	細	堅	灰 青
8-9	22-9	B トレ (II 層中)	三重弧文。厚さ3cm。凹・凸面ともに横なで整形	細 (多少雜物)	堅	灰 白
8-10	22-10	B トレ (II 層中)	2本の弧が残っているが、全体の厚さからして、3本以上の弧であった可能性もある。弧の1つ1つは台形に近い断面であり、ひとつの弧は比較的幅が狭い。凹面に布目・凸面に破目がある。平瓦との接合でなく、1本作りのようである。	細	堅	灰 黄
9-11	22-11	A トレ (III 層中)	2本の細い陰刻線による三重弧文。厚さ約3.6cm。凹面は布日の残る半円形のくぼみがあるが、それ以外はへラで整形されている。側面もへラ整形されている。段顎形式である。	細	堅	灰 白
9-12	22-12	B トレ (II 層中)	2本の幅広の陰刻線による三重弧文。厚さ約1.9cm。凹面に横骨痕と布目が明瞭に残る。また、布の端があたった部分の压痕が横骨痕に直交している。凸面は横なで整形している。	細	堅	灰 黑
9-13	22-13	B トレ (II 層中)	へラによる沈線が無造作につけられている。瓦当の文様は乱れており、意図してこのように製作したものか、製作途中のものか、破損したものか不明である。凹面には布目と横骨痕があり、凸面には浅い額をこしらえている。	細	堅	灰 青

表-2 重弧文軒平瓦一覧

これらのはかにも、重弧京瓦の弧の一端とみられるものが2点出土している。(図9-14・15)以上、重弧文瓦を形狀から大別すると、弧の曲線を浮き出させたものと、端面を陰刻したものとの2種類になる。また、瓦当の製作過程から大別すると、平瓦の端面から直接丸当を作り出したものと、平瓦の端面に別の粘土で瓦当を接着したものとの2種類になる。いずれにしても、2~3の

ものを、除いて、おおむね三重弧文瓦の一部とみられる。

(3) 文字瓦 (図23-1・2・3・4)

文字瓦は4点であるが、うち3点は文字の部分まで欠損しているため文字の全体ではない。また、どちらの方向から見るかわからないものもある。

(4) その他の瓦

図23-5

数々四方の四角の穴が凸面上にならび、凹面に布目がみえる。厚さ1.3cm、灰黒色。残欠のため全貌は不明。

図9-16

厚さ4cmもあり、原形はかなり大きなものであったと推察される。残欠のためどのようない瓦であったのかわからないが、鬼瓦の一部とも考えられる。

図9-17

凹面に灰釉のかかった瓦である。自然釉であるか施釉したものであるかは、判断ができないが、施釉のようにも見える。凸面には丹が塗られているようである。

瓦類をまとめてみると、その出土地点はBトレンチの瓦の推積地点が圧倒的に多く、したがって軒丸瓦・軒平瓦の出土地もBトレンチが多い。Bトレンチの瓦の推積下にはB経石層があることや関連する遺構がみあたらないことから、建築物の廃棄した状態とみるよりは二次的な推積をみる方が自然で、遺構と遺物を結びつけて考えることはできない。他トレンチ出土の瓦も、遺構との関連ではとらえられない。軒丸瓦・軒平瓦の時期は、白鳳から奈良時代にかけてのころとみられるが、さらに詳細にわたっての検討は今後の課題である。

2. 鉄製品

鉄釘 (図23-6・7・8)

鉄釘は3本発見された。いずれも鏽化が進み、原形が損われている。これらの釘の計測値は、全長12cm・(頭ふくらして幅の計測不能)、全長6.3cm・5×6mm、全長3.6cm・3×4mm角の3本でいずれも角釘である。出土位置を順に示すとEトレンチ・Bトレンチ・Dトレンチである。

なお、Bトレンチからは鉄釘のほか鉄滓も出土している。

3. 土器類

土器類のうち、完形のものは1点しかなかったが、欠損部を補いほぼ原形を知り得るものと器形によって分類して述べると次のとおりである。

(1) 高台付壇形土器 (図10-1、図24-1)

十師器。Aトレンチピットトーハ・Ⅲ層中に高台を上に向けて出土した。全体の3分の1は欠損しているが、底部に残っている。器高4.5cm。器化が進み器表および内部はだいぶ荒れており、数カ所にわたって表面が丸くはがれています。底面には、はりつけ高台がしっかりとつけられている。丸くはげたところから推測すると、高台をつけた後、上塗りをしてろくろで壇形しているものと思われる。内部の底には渦巻状のろくろ痕がみられる。器体部は内湾しながら立ち上がり、口辺部において心

もち外反する。胎土はあまりよくなく、焼成軟質、灰褐色を呈している。器表にはうっすらと炭化物の付着したあとがみえる。また、内部においても底部や口辺部にかけてかなり明瞭に炭化物がみられる。



挿図-7 3号住居遺物出土

があり、真上から見た形も少しいひつである。焼成良好・茶褐色である。

③ (図10-3・図24-3)

土師器。2分の1欠損。口径10.8cm・器高3.4cm。Cトレンチ3号住居跡埋土中より出土。①ときわめて類似しているが、③に比して、底部から口辺部にかけての立ち上がりが強いこと、整形がややていねいなことが異なる。

④ (図10-4・図24-4)

土師器。3分の2欠損。正確な口径・器高は不明であるが、それぞれ10cm・3.2cm前後とみられる。口辺部のつくりは①・②に類似しているが、①よりいっそう平たい丸底である。器表は、底部を中心としたヘラ削りと口辺部の横なで整形の境目あたりまで黒色になっている。内部は、口辺部近くまで黒色になっているが、部分的に削がれており、地の茶褐色がみえる。胎土中に多少の夾雜物を含む。焼成は普通である。

⑤ (図10-5・図24-5)

土師器。4分の1欠損。口径11.5cm・器高3.6cm。Cトレンチ3号住居跡埋土中より出土。平たい丸底であって、やや内傾した立ち上がりの口辺であるが、前記④ほど口辺部との境は明瞭でなく、素縁口辺に近い。器表・内面とも、ていねいに横なで整形して仕上げている。胎土・焼成とともに良好である。赤褐色。

⑥その他

土師器の杯形土器の破片が数片あり、そのうち口辺部が10数点みられた。いずれも①から④までと同様な内傾する口辺部で、横なで整形している。出土地はCトレンチ3号住居跡中である。

(3) 杯形土器 (図10-6, 図24-6)

須恵器。2分の1欠損。口径・器高の正確な数値は不明であるが、それぞれ13.6cm, 5.2cm前後とみられる。器表および内部はろくろで整形している。底部は平底に近い丸底で、ろくろを回転させながら、ヘラ削りの整形をしている。そのため、同心円状の削り痕が認められる。胎土緻密・焼成

(2) 杯形土器

① (図10-2・図24-2)
完形の土師器。口径11cm, 器高3.5cm。Cトレンチ3号住居跡の埋土中より出土した。平たい丸底である。内傾した立ち上がりの口辺で、内傾はじめめるあたりの境目でくびい接線が一周している。口辺部および内部は、横なで整形されており、とくに内部は整っている。しかし、器表縁線以下、底部にかけて、各方向から荒くヘラ削りされござる。胎土中には多少夾雜物が含まれている。器形全体にゆがみ

良好である。

(4) 瓷 (図10-7, 図24-7)

須恵器。4分の1欠損。Cトレンチの出土である。蓋のつまみの部分は高台を取り付けるのと同じ手法を探り入れ、円を描くように粘土紐が蓋本体に接合されている。その直径は7cmである。蓋本体の直径は12.9cmであり、ろくろを使用して作られている。つまみの内部にあたるところにはうっすらと糸切り痕が認められる。この蓋と組になる器がどのようなものであるか不明であるが、その口縁部と接合したと思われるところに磨耗痕がみられる。蓋が口縁部からはみ出す部分はていねいに整形されており、内に残れる部分はやや荒い仕上げである。胎土緻密・焼成良好・灰色である。

以上、器形が明確なものについて述べたが、次に、器形は判らないほどの破片となっているが、特色のある小破片についてその種類別に以下に記す。

(1) 二彩片 (図11-8)

小破片であるが、緑と白の施釉がみえる。三彩であった可能性もある。Bトレンチ出土。

(2) 緑釉片 (図11-9, 図24-8)

高台付の塊か皿の一部とみられる。高台はつくり出しであり、高台の接地面近くに浅いくりこみがあり、高台を一周していたものと思われる。胎土は緻密で焼成良好である。Eトレンチ出土。

(3) 灰釉陶器片

底部に窯印のある高台付灰釉陶器片の塊の一部(図11-10)。その他、口縁部(図11-11)など2~3点出土している。いずれもBトレンチ出土。

(4) 須恵器片

①頸部片 (図11-12, 図24-9) Bトレンチ出土。

②ボタン状の丸い突起のついたもの (図11-13)。この突起の中央には指で押したようなへこみがあり、突起の下にはヘラ書きの沈線がある。背面には自然釉がかかっている。(図11-14)の斜めにヘラ書きの沈線が入ったものも背面に同様な自然釉がみられ、両者とも同一個体の一部とみられ、出土地も同じCトレンチである。

③岩片にはしま模様がみられ、自然釉がかかっている。内面には吸盤のような丸い敵目がみられる。(図11-15, 図24-10) Cトレンチ出土。

④底部片 (図24-11)。炭化物が付着しており、底部には糸切り痕がみられる。

以上、土器類の記述中、Cトレンチ3号住居跡埋土中出土の上師器皿は、いずれもほぼ同じ型式であって、幅年上奈良時代のものと比定されるものである。また、Aトレンチピット一ハ出土中の高台付瓶形土器は平安時代のものとみられる。

そ の 他

砥石と思われる石 (図11-16), 石製の臼玉 (図11-17, 図24-12), 環状の錫製品 (図11-18) 古鏡 (図11-19) がある。古鏡は磨耗著しく文字不明である。

(注1) 「飛鳥・白鳳の古瓦」 (奈良国立博物館) 昭和45年・P.291、森井蓮華文(1)の8。
『前橋市史』第1巻 (前橋市) 昭和46年 P.618~619

V 結語

(1)

山王庵寺跡の中心は、塔跡およびその中心礎石である。この礎石の発見は、大正年間のはじめのことであり、日枝神社境内の掃除の際、ゴミを埋めるための穴を開いた時に、偶然発見されたと伝えられている。その後、大正10年、福島武雄氏等によって発掘調査され、東西8尺9寸（約267m）、南北8尺2寸（約246m）、厚さ5尺余（約15m以上）の、周囲に根じめとして土石をつめた巨大な礎石が確認された。そして、その表面は平らに削られ、中央には径65cm、深さ17cmの柱受が掘りくぼまれ、その中央には径26cm、深さ30cmの舍利孔があり、更に、柱受の周囲には、径10.9m、幅5cm、深さ3cmの環状の溝が、そして、ほぼ同規模の放射状の溝が、これから東西南北の四方に刻まれていることも、同時に確認された。（表紙写真参照）

また、こうした中心礎石の所在する辺りは、周囲の地盤より約60cm高くなっていることから、基盤が構築されていたことも明らかとなり、その基段上には、心礎を中心内側に4個、外側に12個の礎石の存在が推定され、間口3間、奥行3間の一辺約12mの塔のあったことが考察されるにいたった。なお、この基段の大きさは、先年、水道管敷設の際に基段の端と考えられる部分が発見された由で、その地点が、中心礎石から約12mであったことから、一辺約20mの方形と推定されるにいたった。

なお、またこの中心礎石の舍利孔の造法は、奈良薬師寺の西塔跡に比較的類似していることが指摘され、この建立の時期およびその形状ならびに規模等は、ほぼそれに近いものとみられてきた。

(2)

前記、中心礎石および塔基段についての記載の中にみると、中心礎石表面の環状溝および放射状溝について、その例は全国的にも聞かない。現在のところ、この山王庵寺塔の中心礎石のみにみられるものであり、それだけにその性格なり機能については、興味あふれるものがあり、古くから話題となってきた。即ち、川村清一博士の換気講説、石田茂作博士の排水溝説、そして尾崎喜左雄博士の排湿溝説などがある。これらは、直接的な目的は異なるが、いずれも柱根部の腐蝕防止という点では一致しており、また、湿気を抜くためのものとみられている前記薬師寺西塔の中心礎石柱受孔の底部外縁に沿う周溝と、それから外方に通ずる円孔の存在を思う時に、まことに至当な見解とみられる。

しかし、こうした見解についても、改めて検討してみると、いくつかの疑問が感じられる。特に、放射状溝について、その主なことを記すと、

1. その方向を、何故、ほぼ東西南北としなければならなかったか
2. 排湿あるいは排水の施設とした場合、果して、これだけの造作を必要としたのか等である。

そこで、改めて放射状溝について、その性格を検討してみることにした。

まず、その主な方向について、礎石をもって計測してみた。舍利孔の中心を基準とした結果は、次のとおりである。

北方溝 N - 5° - E

南方溝 S - 5° - E

東方溝 E - 5° - S

西方溝 W - 4° - N

よって、これらの溝は、90度の角度をもって、ほぼ東西南北の方向を指すことが知れる。しかし

鐵密には、例えば南北線についてみると、平均して北に向かって5度東へふれることになる。

ところで、磁石の方向は、この前橋の辺りでは昭和42年においては真北より、約6度40分西へふれているとされるが、今から1200年前に当る奈良時代の北極星の位置は磁北より東へ4度数10分の位置にあったと聞く。従って、若しこれが事実だとすれば、中心磁石上の放射状構の南北線の北方延長線上に、北極星が位置することになる。よって放射状構の方向は、正しく北極星を基準として決定されたものと推定され、塔中心磁石の放射状構の性格については、かかる点に特に注目したい。

古代寺院の御藏が南面することや、北極星の信仰がすでに奈良時代にあったことは、周知の事実である。ここに北極星を基準として、方向を定めたと思われる古代寺院が出現する。身近な例をもってすれば、上の国分寺はその典型とされよう。他方、古代建築の方法と形態を今日に伝える伊勢の内宮は、その本殿の床下に鋪底された「心の御柱」が、社殿の設計の際の方向、尺度の基準となると聞く。しかばら、山王廃寺の設計・建立に当て、この中心磁石が方位・尺度の基準あるいは基点となつたのではないだろうか。このように考えた場合、放射状構は、湿気等を抜くためのもの以上に、山王廃寺の建立の際の方位と尺度を決定する基準となつたものではないだろうか。

(3)

昨年に始まった山王廃寺跡の発掘調査は、塔中心磁石を基準として実施された。即ち、寺域の推定を目的とした昭和49年度の調査においては、これを起点として、磁北を基準に東西南北各方向の発掘調査のなし得る要所で行った。その結果、塔中心磁石から北方へほぼ1町（約109m）離れた区域において、巨大な掘立柱の建築遺構を検出し、これが、その位置などからして、北門跡と推定されることとなつた。このため山王廃寺跡は、塔中心磁石を中心として、ほぼ二町四方と推定されるにいたつた。

本年度の発掘調査は、昨年度の調査結果を踏まえ、はじめの中心磁石の東北方約50mの位置とした。この位置を選んだのは、この地には、早くから磁石の存在が確認されており、建造物跡とみられていたことと、この部分の一角に、近い将来家の建築が予定されていることであった。しかし実施に当っては、地権者の意向もあって、磁石の配列されている部分は不可能となり、それに隣接する部分の調査に終つた。調査は、8月18日から31日までの間、群馬大学歴史研究部学生、県立前橋工業高校歴史研究部の生徒諸君の献身的な協力により行なわれた。その概要是前に記した通りであるが、これを要約すると、概ね次のとおりである。

① ピットについて

明らかに古代の掘立柱建築の柱穴痕とみられるもの6個、中世あるいはそれ以前の柱穴痕とみられるもの5個、ほかに、性格ならびに時代不明のもの7個が確認された。

② 穴穴住居跡について

奈良時代前半期とみられる堅穴住居跡3個の存在を確認した。

③ 溝および瓦片の堆積について

浅間山B軒石（1108年あるいは1281年噴出）を含んだ地層に覆わられて、ほぼ東西方に向て走る幅平均1.1m、深さ13cmの横断面は浅いU字状の性格不均の溝を確認した。また、その部分には多量の瓦片の堆積をみた。ただし、このB軒石層を含んだ層の堆積は、二次堆積層とみられるので、溝および瓦片堆積の時期には、尚、検討の余地がある。

④ 出土品について

ダンボール箱約40箱分の古瓦と、十師器片、灰釉陶器片、綠釉陶器片、二彩陶器片、ほかに、鉄劍などがあった。古瓦のうち、軒丸瓦は、復弁連華文、軒平瓦では三重弧文が主体をなし、これらは、白鳳期から奈良前期にかけてのものと推定される。

以上、調査の結果について記したが、確認された遺構について、今回の調査では、時間的、経費

的等の制約もあって、充分にその性格を解明することができなかった。従って、獨立柱の建築構構
堅穴住居跡、そして、瓦の堆積した滑等の規模・形状・そしてその性格の把握は、山王庵寺との関
連の有無を併せて、今後、解明しなければならない大きな課題となつた。かかる意味において、こ
の度の発掘調査は、ここにあらわれた結果よりも、むしろ今後この地域の調査の大きな指針となる
ものであり、その意義することは大きい。

(4)

山王庵寺は、その存在を示す遺骨および遺物より、全國的にも稀にみて豪華、華麗な寺院と推定
され、そこには全國的にも水越した群馬の古墳文化の結実と、東方の磐田上野国の原点がある。し
かし、その現状をみると、あまりにも解明されない面が多く、また、各種開発等による破壊の危険
も大きい。こうした中において、前橋市教育委員会では、長期的な学術的な発掘調査を計画し、國
庫ならびに県費補助を得て、ここに第2年次の発掘調査を実施した。その調査概報の結語を摘する
に当つて、この山王庵寺の中心的遺構である塔中心磧石の放射状溝について問題を提起し、併せて
これを基準として実施された発掘調査の結果をまとめた。こうした発掘調査とその結果が、これに
付随して提起された塔心磧の放射状溝の問題と共に、今後、古代史研究の重要な史料として、ある
いは貴重な文化財としての山王庵寺解明の諸調査に寄与すること多いものと信ずるものである。



図1 発掘地点付近 松の木の根元が塔心礎



図2 Aトレンチ内ピット一イ

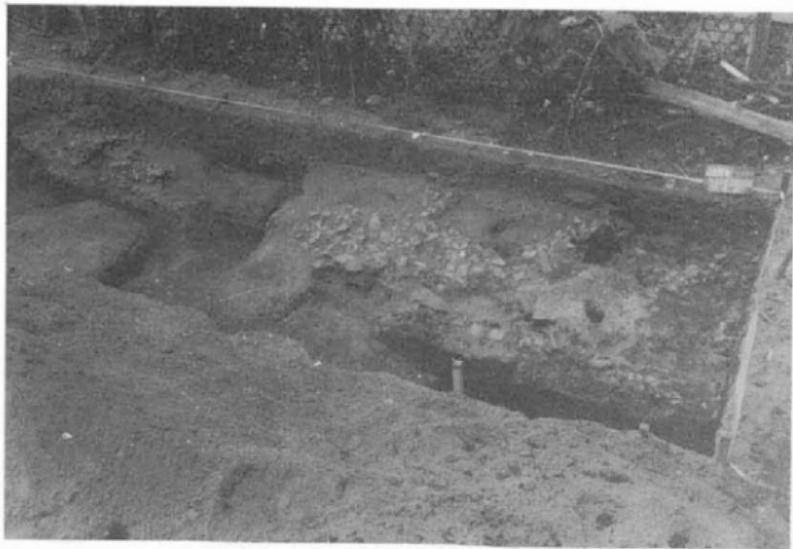


図3 Bトレンチ内 瓦の出土状態

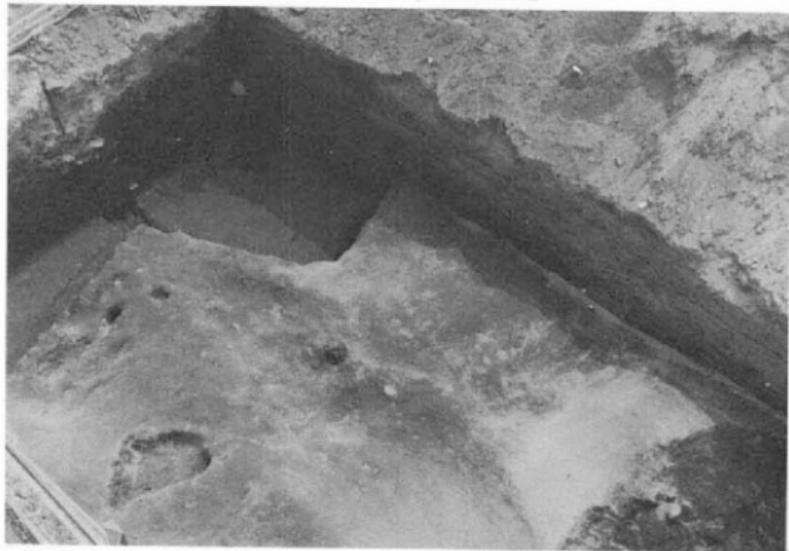


図4 Bトレンチ内 1・2号住居跡

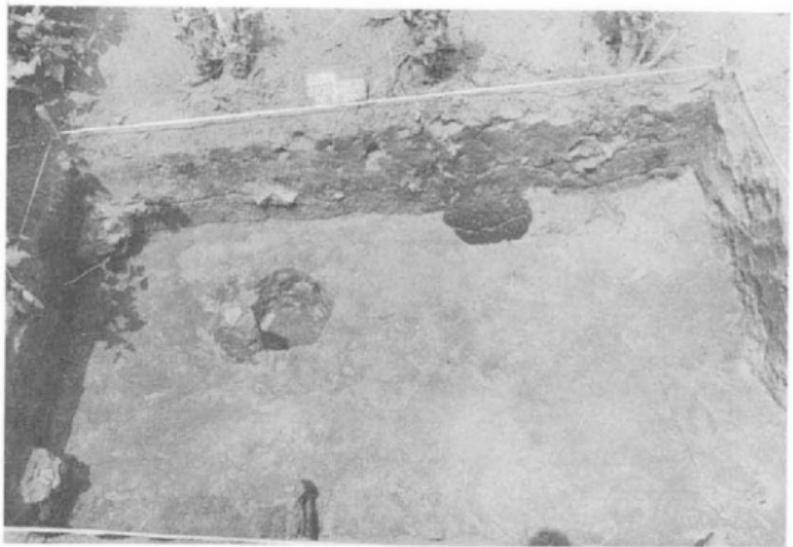


図5 Eトレンチの状態



図6 Fトレンチの状態

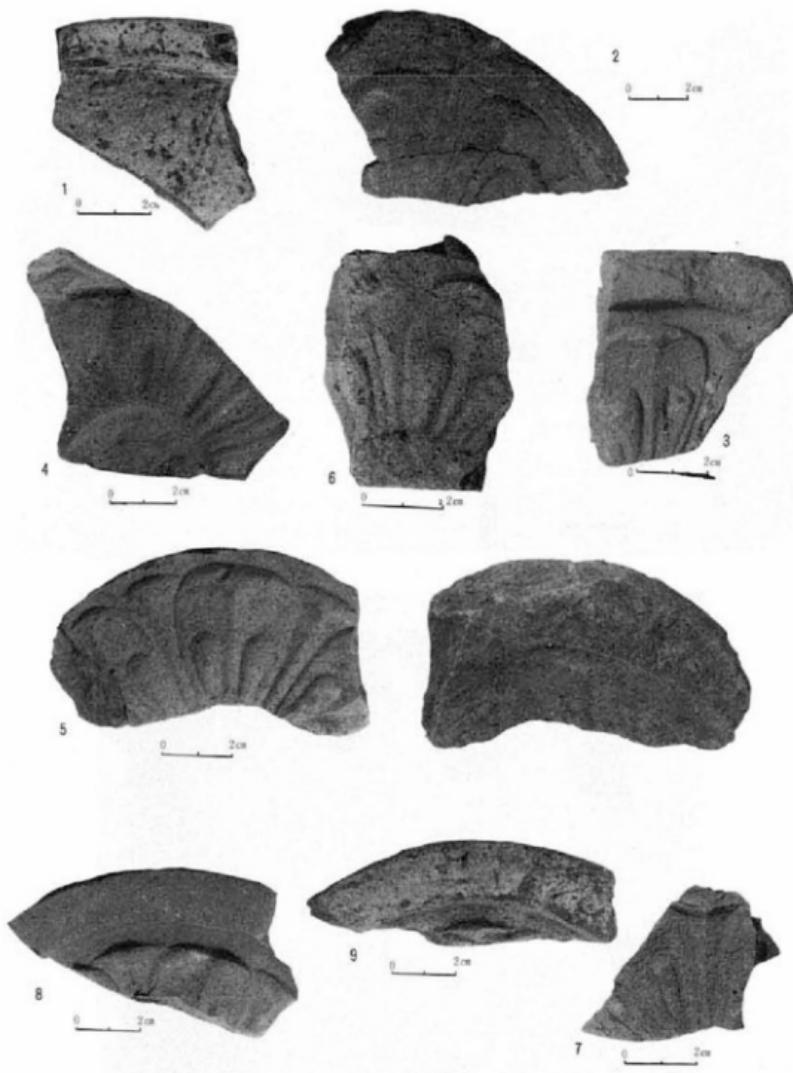


图7 轩丸瓦

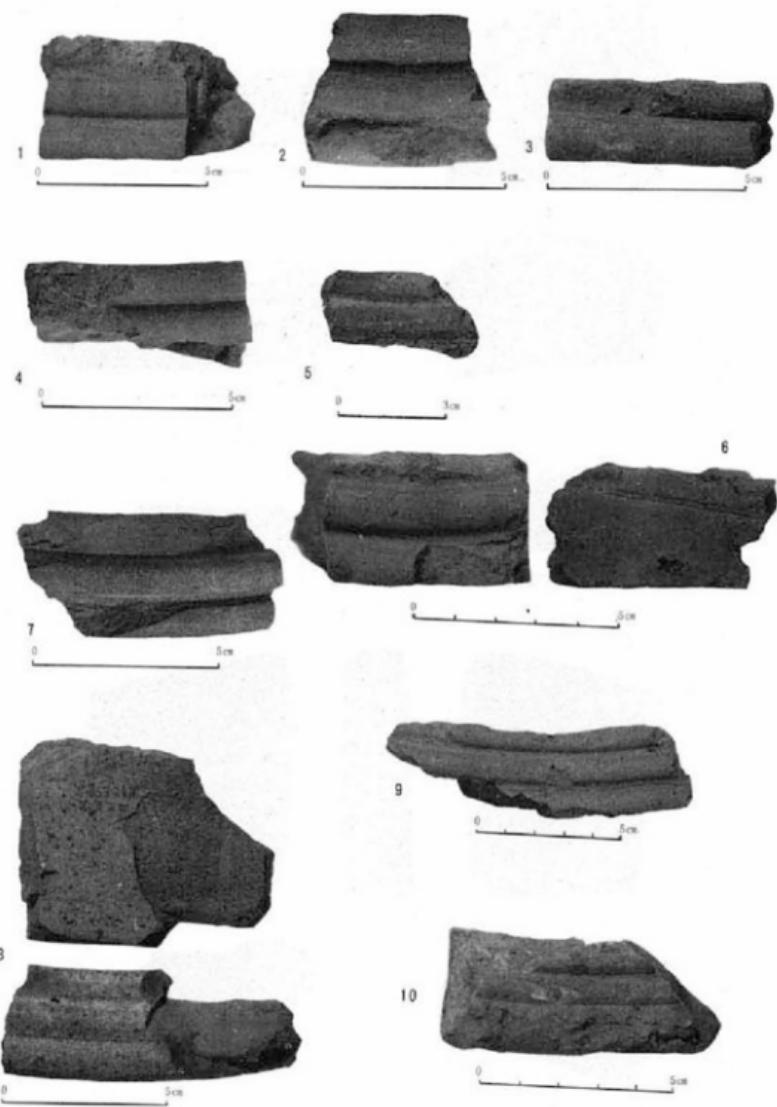


図8 軒平瓦

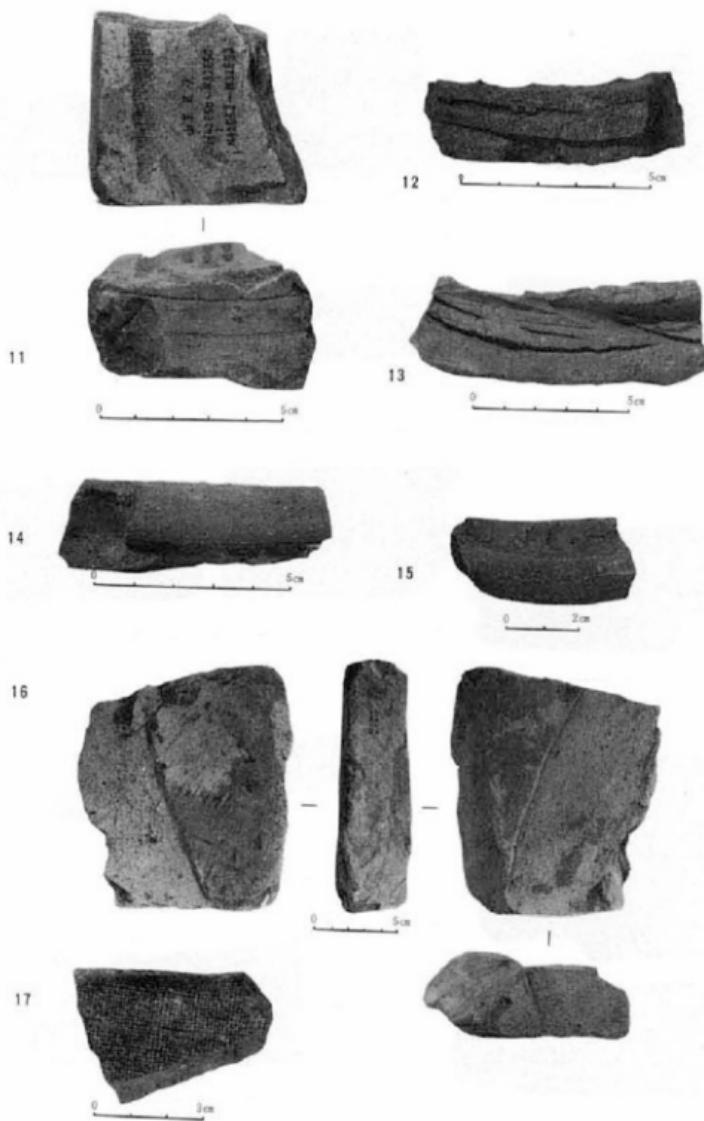


図9 軒平瓦・その他の瓦

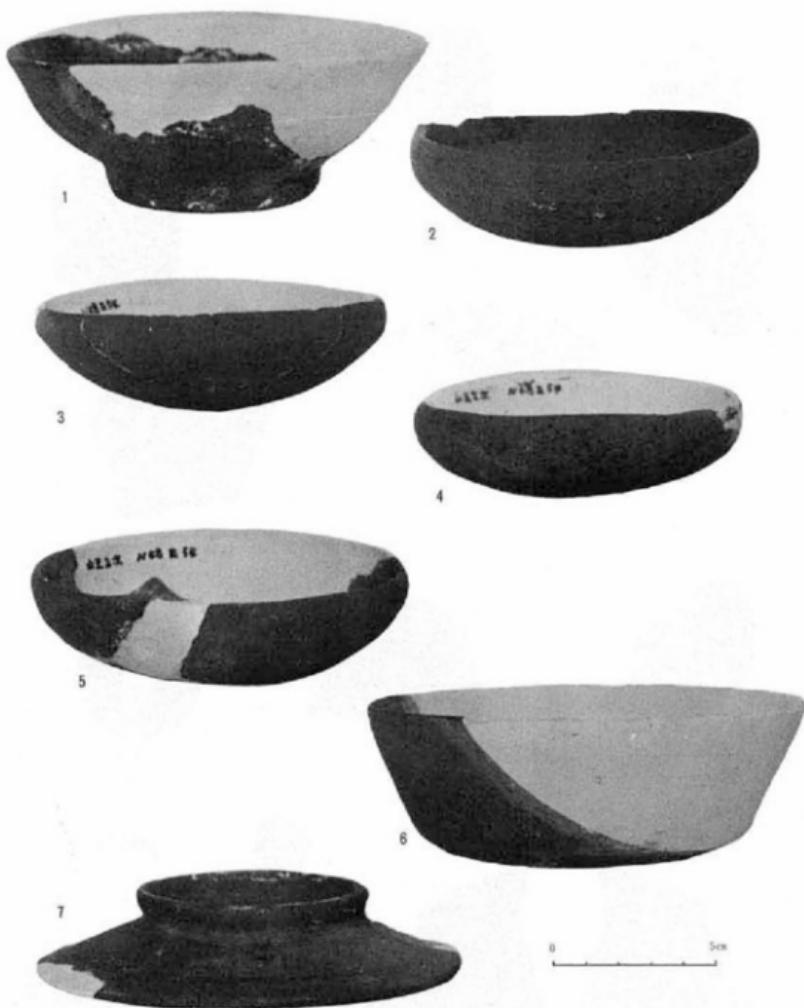


圖10 土器類

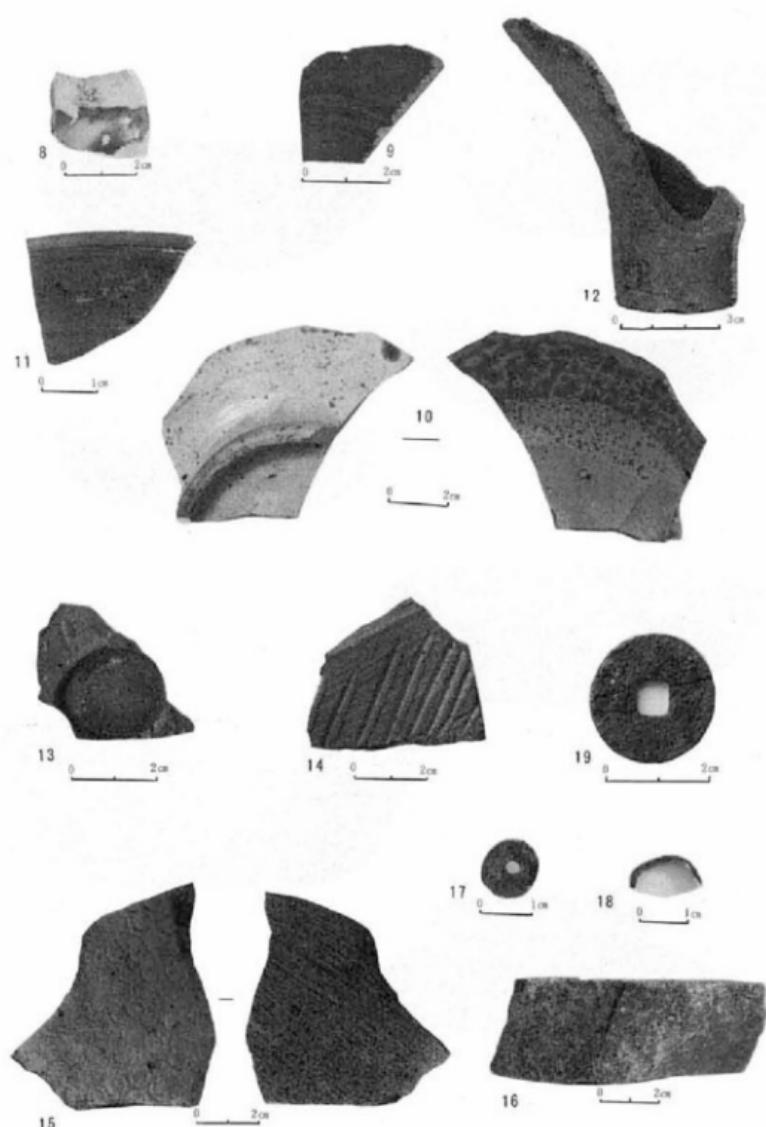


図11 土器・その他

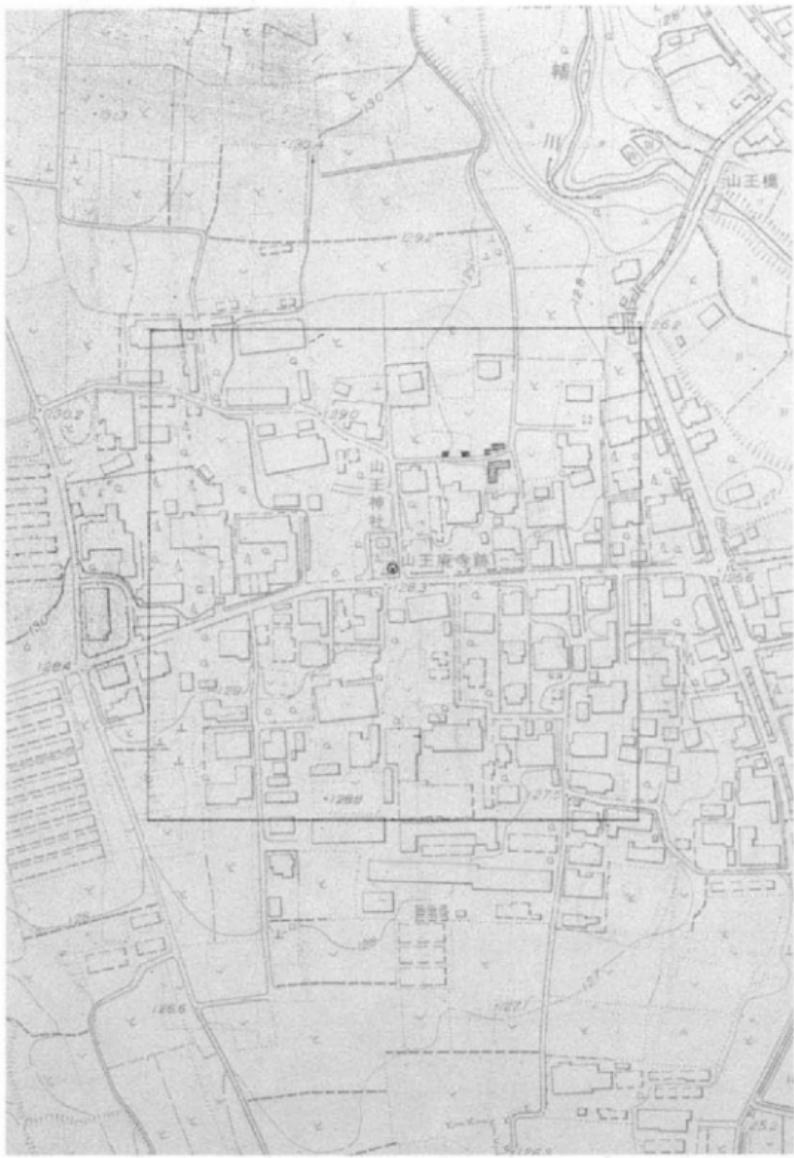


図12 山王廃寺跡現況図 (2,500分の1)

Aトレレンチ

下出[2]

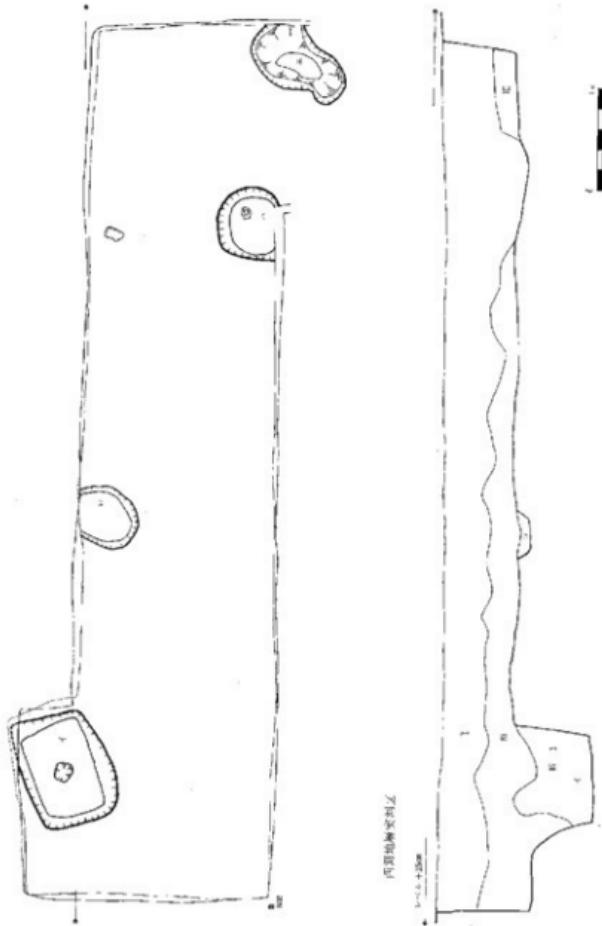


図13 Aトレレンチ平面図および西側地盤実測図

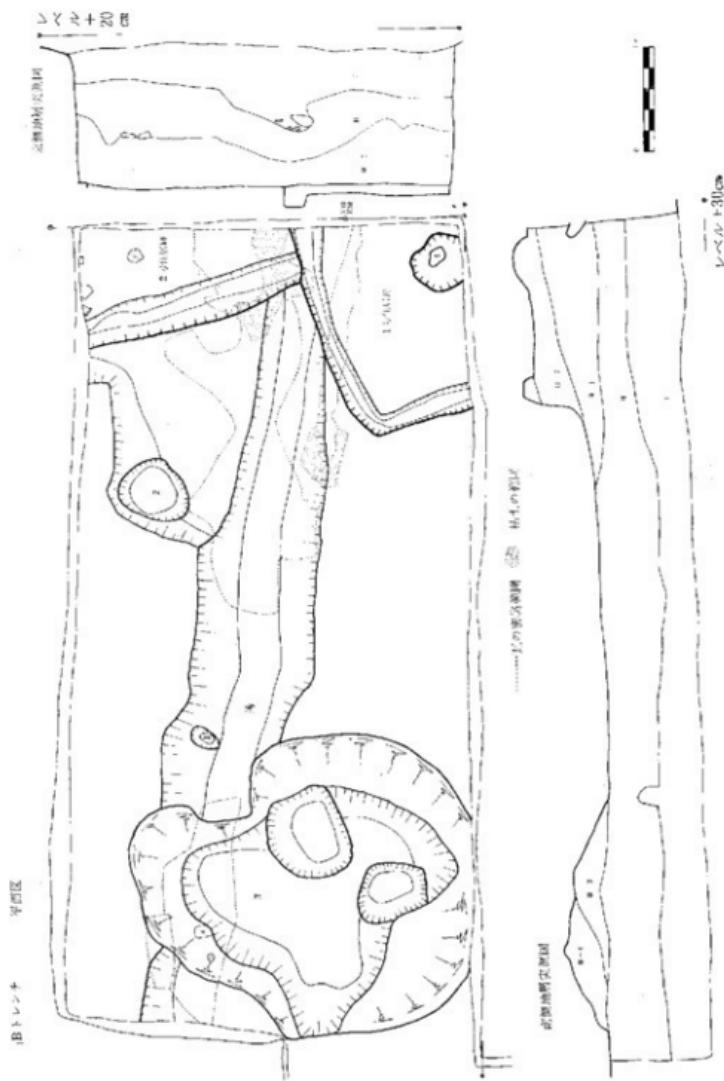


図14 Bトレンチ平面図および東側・南側地盤変形図

Cトレンチ（3号住居跡）平面

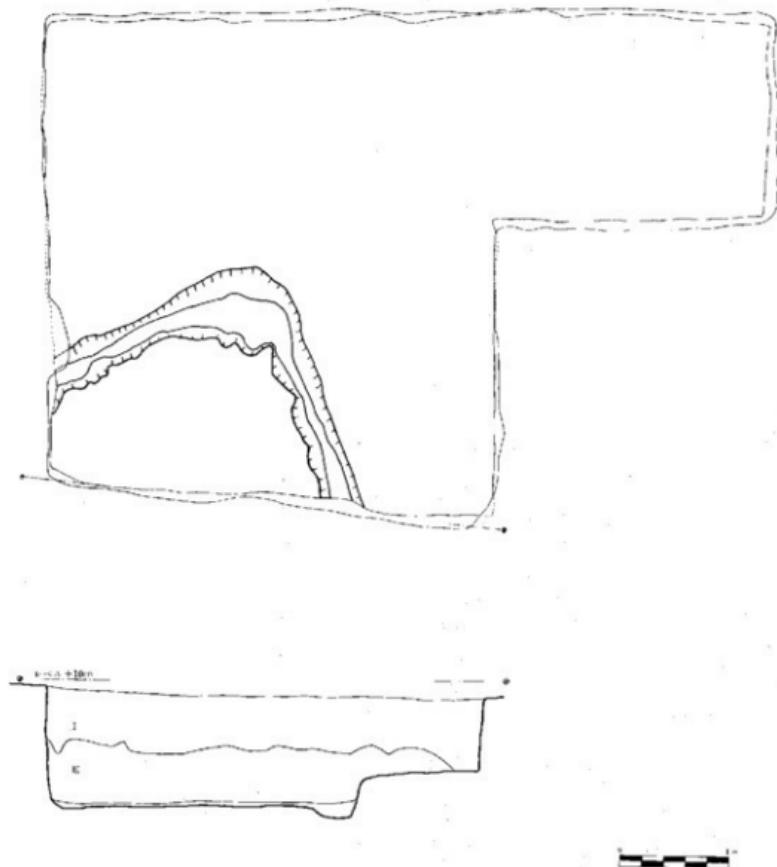
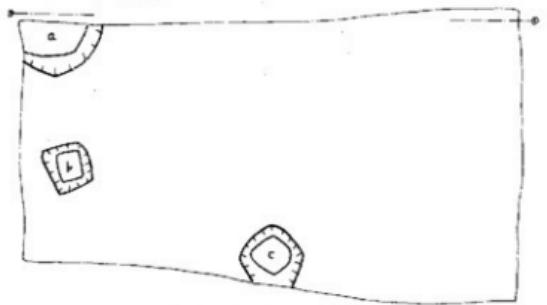


図15 Cトレンチ平面図および南側地盤実測図

D トレンチ平面図



北側地層断面図

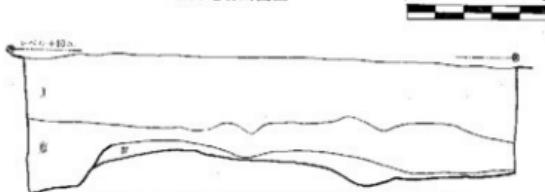
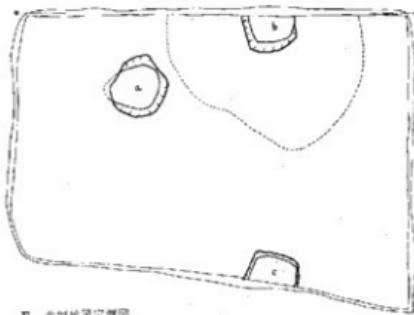


図16 D トレンチ平面図および北側地層実測図

E トレンチ平面図



北側地層実測図

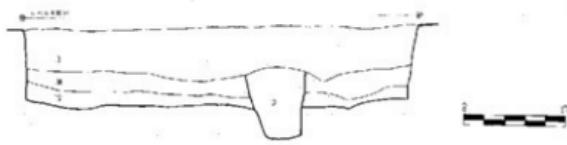


図17 E トレンチ平面図および北側地層実測図

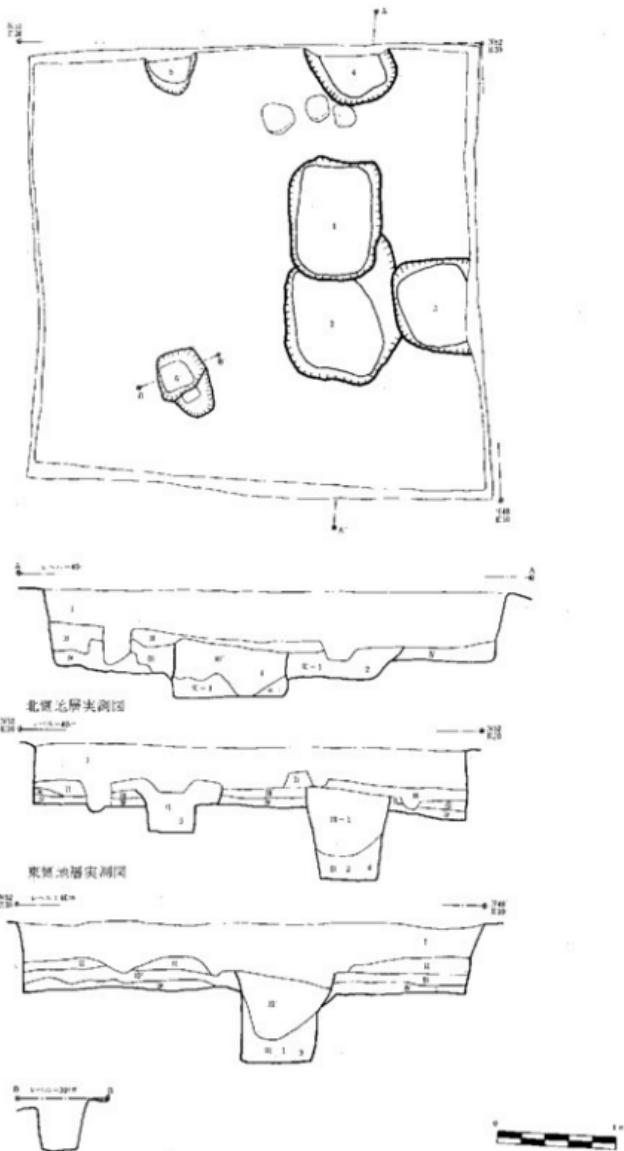


図18 Fトレンチ平面図および地盤実測図

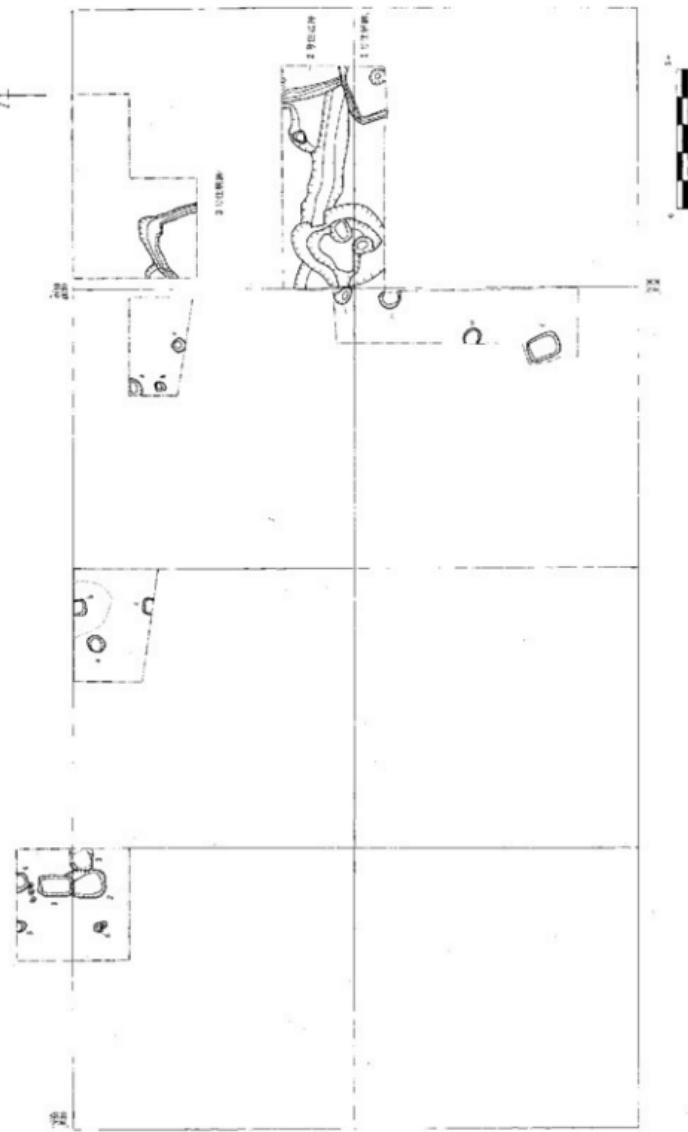


図19 ドレンチ内滴管全体図

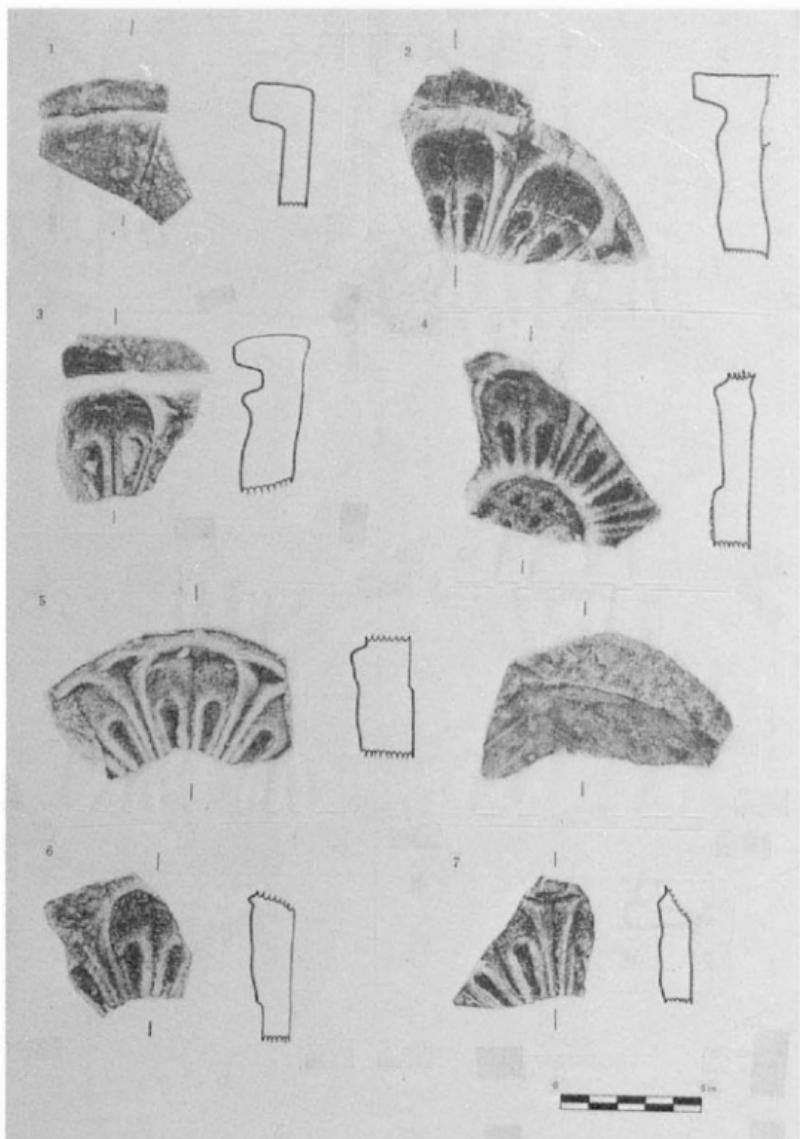


図20 轩丸瓦拓本

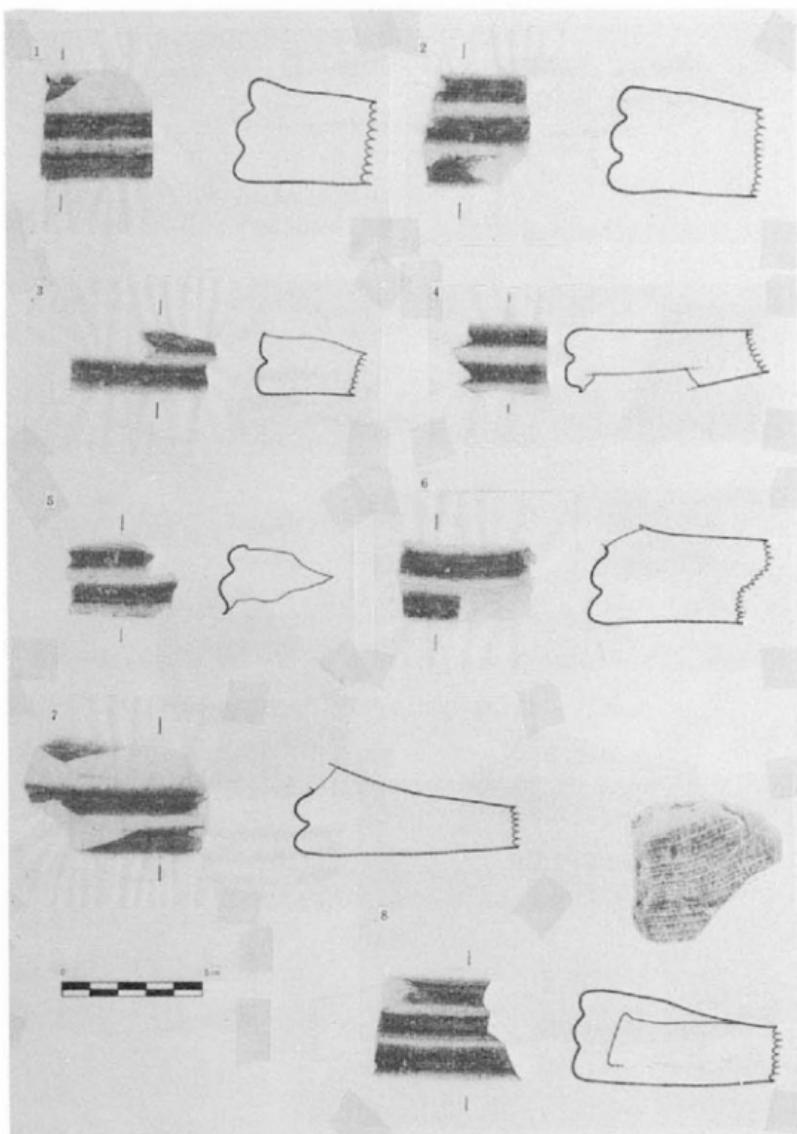


図21 軒平瓦拓本(1)

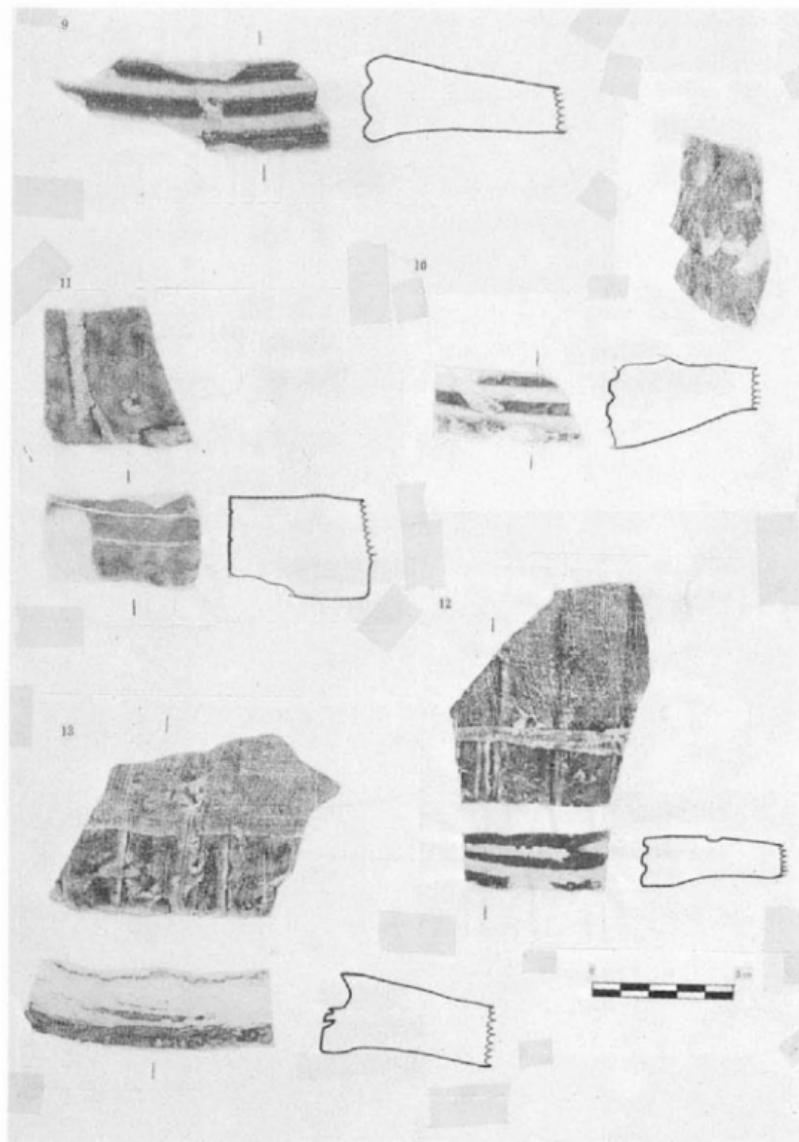


圖22 軒平瓦拓本(2)

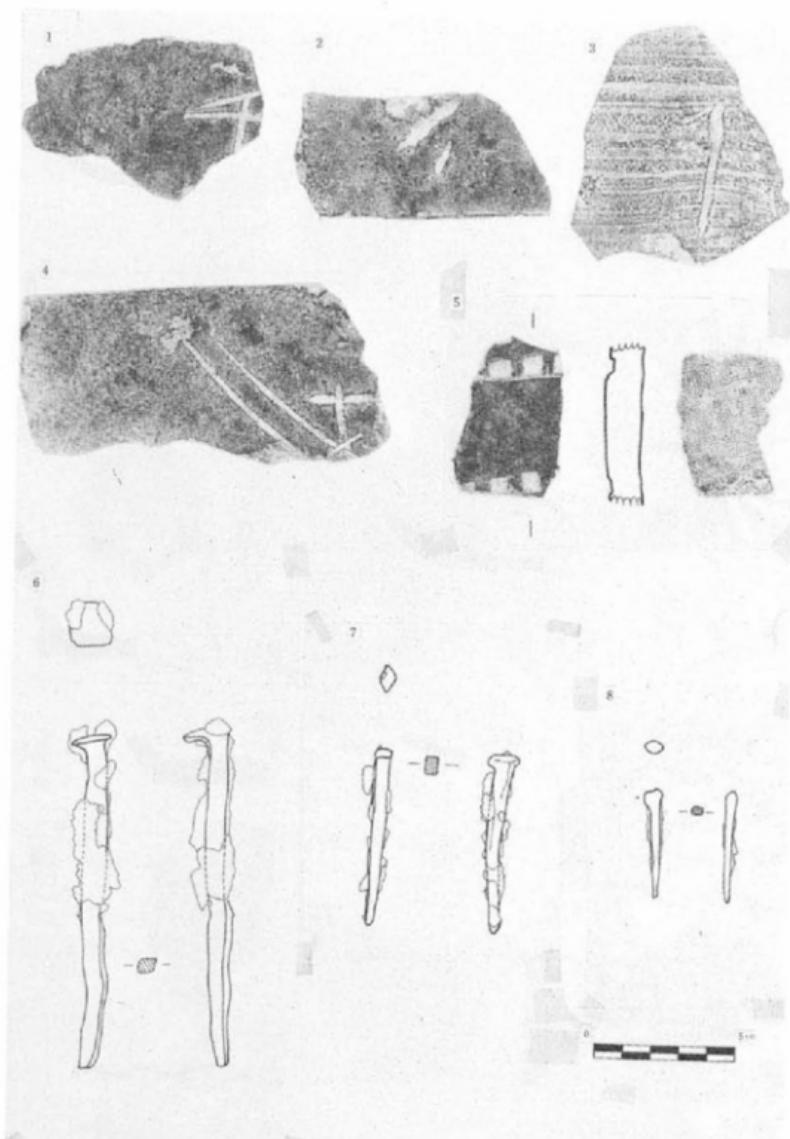


図23 文字瓦・その他の瓦拓本・および鉄釘実測図

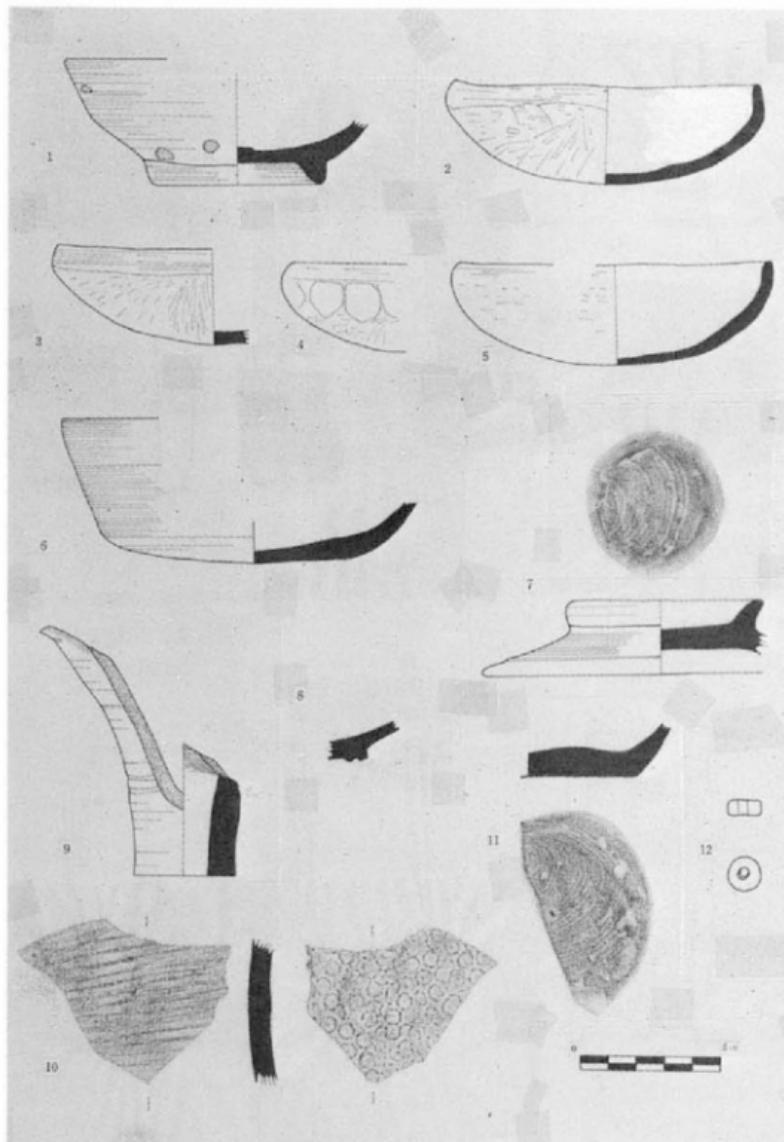


図24 土器類その他の実測図および拓本

山上庵寺跡第2次発掘調査概報

昭和51年3月31日 印刷

昭和51年3月31日 発行

印刷 有限会社 原田印刷所

発行 前橋市教育委員会

前橋市大手町二丁目11番1号

電話（0272）24-1111